

**創立30周年記念**  
**日本植物形態学会30年のあゆみ**



**日本植物形態学会**  
The Japanese Society of Plant Morphology



## ■ 目次 ■

「日本植物形態学会 30 年のあゆみ」について	峰雪 芳宣 — 1
日本植物形態学会設立の経緯 ～生命現象探求へ「形」から迫る～	黒岩 常祥 — 3
Plant Morphology のリニューアル ～日本植物形態学会の一層の発展を願って～	鮫島 正純 — 19
学会設立 25 周年記念事業 ～“Atlas of Plant Cell Structure” の出版～	野口 哲子 — 25
日本植物形態学会と IIRS	大隅 正子 — 28
日本植物形態学会 30 年史と科研費改革	河野 重行 — 30
日本植物形態学会の更なる発展を願って	今市 涼子 — 33
日本植物形態学会創立 30 周年記念座談会 峰雪 芳宣、松永 幸大、Ferjani Ali、永田 典子（進行）	— 35
<b>&lt;資料&gt;</b>	
1. これまでのあゆみ	— 53
2. 大会一覧	— 55
3. 歴代役員	— 59
4. 会員数の変遷	— 63
5. 学会設立準備委員会メンバー	— 64
6. 学会設立趣意書（1987 年）	— 65
7. 学会会則（1998 年）	— 66
8. 第 1 回日本植物形態学会大会プログラム（1998 年）	— 67
9. Plant Morphology 創刊号（1989 年）	— 69
10. Plant Morphology Vol. 10（1998 年） 原襄先生追悼号	— 75

## 「日本植物形態学会 30 年のあゆみ」について

第 11 代会長 峰雪 芳宣

(兵庫県立大学大学院生命理学研究科教授)

日本植物形態学会が創立して 30 年が経ちました。2018 年度の大会の時に、日本植物形態学会創立 30 周年の何か企画をしてはという話が出て、議論した結果、「日本植物形態学会 30 年のあゆみ」を学会ホームページ上に残すことになりました。日本植物形態学会は昭和 63 年 (1988 年) 1 月に 155 名の会員で発足しています。発足には 3 年の準備期間があり、昭和 62 年 (1987 年) 11 月 26 日に筑波大学で開催された日本植物学会第 52 回学会の関連集会で会則が決定されました。第 1 回大会は昭和 63 年 10 月に岡山大学で開催されていますが、第 2 回大会 (東北大学) から今年の第 30 回大会 (広島県情報プラザ) まで平成の時代に開催され、いよいよ今年の第 31 回大会 (東北大学) から令和の時代に移ります。本学会の今までの歴史はまさに平成の時代とともに歩んできたこととなります。新しい令和の時代に移行するに際し、一度過去を振り返ることは意味のあることだと思います。

初代庶務幹事の津恒良先生の事務報告 (Plant Morphology, Vol. 1, 1989) によりますと、最初は世話人 7 名で検討を開始し、昭和 61 年 10 月 8 日に原襄先生 (東大・教養) を代表として、植田勝巳先生 (奈良女子大・理; 以下当時の所属を記す)、小野莞爾先生 (熊本大・理)、加藤雅啓先生 (東大・理)、黒岩常祥先生 (基生研)、佐藤利幸先生 (北大・低音研)、三戸信人先生 (山口大・理)、田中健治先生 (名大・医)、田中隆荘先生 (広島大・理)、長田敏行先生 (基生研)、津恒良先生 (慈恵医大)、福田泰二先生 (千葉大・教養)、堀輝三先生 (筑波大・生物科学)、増田恭次郎先生 (富山大・理)、村上悟先生 (東大・教養) の合計 15 名からなる設立準備委員会を立ち上げ、初代の会長、評議員、役員が決定したところで、初代の執行部に移行したとのことでした。残念ながら、この 15 名を含む初期の立ち上げにご尽力いただいた先生方のうち、原襄先生 (初代会長)、津恒良先生 (第 2 代会長)、植田勝巳先生 (第 4 代会長)、長船哲斉先生 (初代会計幹事)、西田誠先生 (初代会計監査)、田中隆荘先生、堀輝三先生など、すでに鬼籍に入られた方も多数おられます。また、当時若手で活躍しておられた先生方も、多くの方々が大学や研究所を定年退職されており、今、設立当時のことを記録に残しておかないと、忘れ去られてしまうとの危機感がありました。

幸い一昨年度に学会のホームページをより見やすく、外に向けて発信できるようにするためのリニューアルを行いましたので、このホームページを使って日本植物形態学会発足当時の状況などを記録に残しておこうということになり、本事業が立ち上がりました。黒岩常祥先生をはじめ、歴代の会長、編集長などの役職につかわれていた先生方には、学会の設立、運営や学会誌出版などについての項目を作成する際にご協力いただきました。どうもありがとうございました。また、本企画を中心になって実行した佐々木成江広報委員長、吉田大和広

報委員、宮沢豊前広報委員、永田典子庶務幹事に感謝いたします。

令和元年 9 月

## 日本植物形態学会設立の経緯 ～生命現象探求へ「形」から迫る～

第3代会長 黒岩常祥

(日本女子大学客員研究員/日本学士院会員/東京大学名誉教授)

日本植物形態学会が創立以来30年を迎えたとのこと、真におめでとうございます。学会本部より、学会設立に関係した者の一人として、設立当時の模様を書くようにとのお話がありました。個人的内容も少し含むので恐縮ですが書かせて頂くことにしました。一部記憶が薄れているところがあるかと思えます。ご指摘頂ければ幸いです。

手元にある最も古い形態学の教科書、1958年発行の濱健夫著「植物形態学」の中で、ミトコンドリアはコンドリオゾーム、核小体は仁です。研究者が植物を使う時、ここで見られるように植物細胞の基本を述べ、植物特有の多様な現象に興味を抱き研究を進めるのも一つのあり方でしょう。一方筆者は座右の書として1958年発行の湯浅明著「細胞学」を使ってきました。植物は交配し易いエンドウマメによる遺伝学の研究を基盤に、ゲノムサイズが大きかったこともあり、根端分裂組織を使った染色体の細胞遺伝学的研究が盛んであったように思います。筆者も、細胞・細胞小器官(オルガネラ)の分裂/増殖と遺伝の研究に最適な研究材料として、植物(藻類)を扱ってきました。解析法の基盤に「形態(観る)」が必須でした。我々の古くからの仲間であった植田勝巳先生のことを、野口哲子先生が述べておられます。「植田先生は数回危篤状態になりましたが、目覚められた時に、奥様に何をしていたかを問われると、“電子顕微鏡を見ていた”“暗室で写真を焼いていた”などと答えられたそうです。2006年に研究活動の終了を宣言されましたが、魂は最後まで研究者であり続けられました。」先生は電子顕微鏡の大家でいらっしゃいましたが、先生が残された論文と共に、観ることに魅せられた先生の深い思いが伝わってくる逸話ではないでしょうか。

### 背景:

筆者も形態学的解析をベースにおいた研究に魅せられた一人であろうと思っております。形態学的研究を基盤に研究を推進して来たのは、形を観て発見することが個性でもありますが、その成果に説得力があると思うからです。東大医学部の廣川信隆先生がツァイスの記念講演会の講演で「百聞は一見に如かず」を強調されていましたが、強く同感を覚えました。

高校で結核に罹患し、すべての活動が停止後、回復期に見えた微かな将来に、子供の頃からの遊びの延長として、生物の研究者を夢見ました。研究課題を選択するにあたって、生物に共通性の高い課題として、細胞の分裂/増殖を選びました。予備校の先生に相談すると、その分野としては米国で長らく研究をされ、東大臨海実験所から東京都立大学に移られた団勝磨先生がおられると教えて頂きました。団先生はD・メイジャー先生と、研究材料として細胞が大きく細胞分裂が見易いウニ卵を開発され、使っておられました。今でも先生が黒板に描かれた大きなウニ卵の分裂像が目には浮かんできます。昼夜の授業でも個人的にも先生は、「研究者になるなら、あまり他の人がやらないことをやりなさい」とも言われ、そのためには「研究に適した材料の選択」、「新たな技術の開発」が必要だと言っておられました。また

この頃、実習中に T. ドブジャンスキー先生が見え、「研究の成果を進化的に考察すること」の重要性を語られました。この時の両先生の教えは生涯の研究の基範となりました。しかし 1950 年後半から 1960 年代は分子生物学の黎明期で、ほとんどの学生や先生方は大腸菌、アカパンカビ、酵母など微生物を使って、遺伝子/分子生物学的研究を開始していました。

しかし“形に拘る性格”であったこともあり、卒研では勝手に、動物細胞よりゲノムサイズが大きく、染色体が太く観察し易いタマネギの根端分裂組織の体細胞分裂や、近くの農林高校で培養していたユリの株を頂き減数分裂を、光学顕微鏡と電子顕微鏡で観察をはじめました。それを見かねた他の研究室の先生が、細胞遺伝学的研究をしたいのなら、東京大学理学部植物学教室の遺伝学研究室（田中信徳教授）が良いと教えてくれました。そこで大学院では田中研に移り、染色体が 3 本のキク科植物のクレピスの根端細胞を使って、細胞周期における染色体の複製/動態を、光学顕微鏡オートラジオグラフィと、新たに開発した超高分解能電子顕微鏡オートラジオグラフィ法を使って、細胞遺伝学的に調べました。その結果、分裂周期を通じた染色体 DNA の複製様式を捉えることが出来ました。しかし実験材料として根端分裂組織を使用する不利な点は、細胞分裂が同調しておこらないことです。細胞核内で起きる微細な変化を誘導する物質を、生化学的に同定することは出来ませんでした。そこで細胞核分裂が同調しておこる生物を探し始めたところ、湯浅明先生が真正粘菌には多核の変形体の時期があり、そこでは細胞核分裂が高度に同調化していること、そして実際に粘菌を使われているお茶の水女子大学の太田次郎先生を紹介して下さいました。観察の結果、粘菌では細胞核分裂は 100%同調して起こりました。粘菌は非常に魅力的な材料でしたが、クレピスで成果をまとめ学位を得ました。

大学院修了後、東京都立アイソトープ総合研究所に勤めました。ここでは公務としてヒトの染色体に対する放射線の影響を、X線技師の血液を遣って調べました。幸い異常はありませんでした。公務の後、粘菌を使って電子顕微鏡オートラジオグラフィで RNA 合成を調べている時、ミトコンドリアが電子密度の高い核をもち、活発に RNA 合成をしていることに気付きました。次第に粘菌のミトコンドリアの魅力に引き込まれて行きました。この頃、岡山市の旭川近くの商工会議所で日本電子顕微鏡学会が開催され、東大で 3 年先輩だった研究部の助手をされていた松島久さんと参加しました。岡山の自然の豊さと、ゆったり流れる旭川、遡上する稚鮎の群れ、背景にある城の美しさにすっかり魅了されてしまいました。数ヶ月後、生物科学ニュースに岡山大学の理学部生物学科の「植物形態学」講座（武丸恒雄教授）の助教授の公募が載りました。応募後半年して忘れかけた頃、採用が決まりました。

### 1973-1978 年「植物形態」学に出会う

岡山大学は自然に囲まれ、大学構内も広く、構内を横切って東西に小川が流れており快適な環境でした。理学部生物学科は動物と植物の生理学、形態学の講座と遺伝学の 5 講座があり、大学院は修士課程までしかありませんでした。ここで「植物形態学」(シヨッケイと呼ぶ)講座に所属することになりました。前年まで植物形態学者で、ネジモクなどの海藻研究で知られた猪野俊平教授が定年となられ、キノコを使って形態形成を遺伝学的に研究されていた武丸先生が教授となられたばかりでした。豪華な広い居室を講師/助教授の小生に譲って下さいました。ここで自然に親しみながら粘菌の研究を開始し、今日の研究の原点になる真正粘菌で「ミトコンドリア核(核様体)分裂」を発見しました。最初の学生は日詰雅博さん(キトログリア編集長、愛媛大学名誉教授)、翌年には河野重行さん(メンデル協会会長、東大名誉

教授)ら数名ずつ入って来て、研究は一段と進みました。

4年ほどして大阪大学の神谷宣郎先生の研究室の石上三雄さんが、富山で開催された日本植物学会で小生の発表を聞き、研究室のセミナーに招聘してくれました。この機会に、田澤仁先生をはじめ黒田清子先生、永井玲子先生他、神谷研の多くの皆様の知己を得、現在まで続いています。翌年1977年、定年後、岡崎に建設中の生物科学総合研究機構(現自然科学総合研究機構)基礎生物学研究所に移られていた神谷先生が、「日本細胞生物学会役員会で岡山に来たから」と市内のホテルに呼んで下さり、「君も機器など十分に準備のある研究所へ来ないか」、更に「近くに良い釣り場もありますよ」と誘って頂き、助教授として移りました。講座名は細胞生物学研究系「細胞機構」研究部門でした。

### 1978-1984年「植物形態」は科学研究費の項目にあった

岡崎の研究所に移って暫くして、東京慈恵医科大学におられた新津恒良先生がグループ研究として小さな7-8名ほどのグループ班を組織し、科研費「植物形態」に加えて下さり、この分野の研究者との連携・活動が始まりました。この頃は生物科学における多様性を重視する考えがあったのでしょう。「植物形態」の項目がありました。その後、科研費の研究分野として1985年~1994年は「植物形態・分類学」になりましたが、1993年~2001年には植物が無くなり「生物形態・構造」、更に2016年~2018年までは形態・構造となり、更に2021年までは小区分44040「形態および構造関連」となっています。科研費の項目に多様性が失われるのは、基礎的な研究の発展への入り口が狭くなるようで心配です。

### 1985-1988年「植物形態学会の設立」

こうした科研費の項目から見ても、重要である「植物」の項目が失われることを危惧し、学会創立への動きが始まりました。日本植物学会では学会の前日に関連集会を開いても良いことになっていましたので、形態に興味のある有志が集まり、研究発表会を開催していました。一方前述のように、分子生物学や細胞生物学などの発展とともに、植物形態の分野を無くすか、動物と統合して形態とするということが起きてきました。この頃筆者は基礎生物学研究所から東京大学理学部植物学教室に移ることになり、この際、遺伝学研究室の飯野徹雄先生から、自由に研究をしても良いが、(高等)植物に関わる実習や授業などはやって下さいとのことでした。兼任のためしばらく岡崎と東京を行き来していましたが、東大教養部で、永らく高等植物の組織を使って植物形態学的研究をされてきた原襄先生と相談する機会が増えたこと、慈恵医大の新津恒良先生が植物形態に科研費を申請して下さったこと等から、日本植物形態学会の存在の重要性を認識しはじめ、設立に向け準備を始めました。それまでの植物形態に関するグループとしては、前述のように、1985年頃から日本植物学会で関連集会の一つとして活動してきたものが基盤としてありました。

○日本植物形態学会設立準備委員会(1987年1月10日、岡崎)：

原襄先生、新津恒良先生、植田勝巳先生方と相談し、1987年1月10日に15名で、日本植物形態学会(設立)準備委員会を基礎生物学研究所で開催することになりました(図1)。この学会の立ち上げ時の一連の作業には、会計関係を根本泰行氏、庶務関係を黒岩晴子氏にやって頂

きました。彼らから聞いた話では、集合時間に遅れそうだった堀輝三先生が「豊橋で乗った名鉄名古屋本線の車内を後から前まで走って来た」とのことでした。当時の先生の学会設立にかける意気込みが伝わるような逸話です。

○趣意書と会則（1987年11月26日、筑波）：

その後、原先生を中心に各人がやりとりをし(図2)、先生が1987年10月末までに趣意書(図3)や会則の原案(図4)を整理されました。そして1987年11月に筑波で開催された第52回日本植物学会の関連集会(26日)で、堀先生が責任者となって「日本植物形態学会の設立について」の委員会を行い、趣意書と会則が正式に提案され、承認されました。発起人は86名でした(図3)。

○第一回日本植物形態学会(1988年10月12日、岡山)：

1988年1月1日から日本植物形態学会が発足し、第1回大会は岡山大学で第53回日本植物学会の際に開催され、その時の日本植物学会の学会長は千原光雄先生、大会会長は武丸恒雄先生でした。この第1回大会は、原先生を日本植物形態学会の会長として大学構内で開催することができました。日本植物学会の研究発表プログラムを見ると、大会会長のご配慮か、他の研究集会が岡山大学の外であったのに、日本植物形態学会は10月12日に大学内のB、P会場となっており、他の会議の日程表、関連集会の内容とともに紹介されています(図5a, b)。それからは会員の皆さんの熱意のお陰で、毎年大会が開催され、順調に学会運営が進んできたと思っております。小生の東大での研究室も、以後日本植物形態学会での発表を続けました。

○日本植物形態学会の会員名簿：

1988年2月には日本植物形態学会会員名簿が出来、155名の会員が記載されています。1990年には堀先生が世話人となり科研費を植物形態・分類学の分野で申請しておます(図6)。その後1995年12月31日には252名に増えています(図7)。所属、連絡先の他、研究内容として材料やテーマも記載されており、研究者交流に役立ってきたと思います。

○日本植物形態学会会長の時：

二年ごとに会長が変わり学会設立から7年後(1994年)、事務局が東京慈恵医科大学であった時に、小生が会長に選出されました(図8)。この時、医学や農学系など実学系の学会には多くの賞があるのに、基礎生物(植物)学など「非実学」の学問分野ではありませんでした。教員公募などの応募に際し、賞がある方が有利と聞いていましたが、諸先生方に何うと、植物学分野では学術的視点から、賞の設立に反対する方が多いとの事でした(もっともな意見でもありました)。しかし会長就任後、日本植物形態学会賞等を、河野さんをはじめ多くの先生方と相談して策定しました。第一回の日本形態学会賞は原襄先生、平瀬賞は植田勝巳先生、長船哲斉先生、奨励賞は塚谷裕一先生、藤江誠先生の各氏が受賞されています。今手元にあるPLANT MORPHOLOGY 8, 1996を読むと、先生方の意気込みや内容の重厚さを感じます。この冊子体で、当初から2007年頃まで20年近く、表紙に使われていたイチョウの絵は、田中健治先生のお嬢さんの田中尚子氏に依頼し、デザインして描いて頂いたものです。

この頃は、私は日本植物形態学会だけでなく、日本植物生理学会、そして日本植物学会に

も参加していましたので、こちらでも積極的に賞を作りました。日本植物学会では2003年庶務幹事の河野さんに細かい点まで全面的に協力して頂きました。日本植物生理学会の賞は、2004年に西村光雄先生と一緒に策定しました。

## 2000-現在 「日本植物形態学会の展望」

○長続き：

ここに至るまでいろいろな研究社会の展開がありましたが、日本植物形態学会が30年も順調に続いていることに驚かされます。やはり研究の根底に、学問として対象を「観て発見する」、「観て確認する」、「観て楽しむ」などのことがあるからでしょう。

○若い学生の発表の場、研究交流の場：

設立の理由にも書いてありますが、学生など未だ研究が十分進展していなかったり、発表に未熟であったりというような状態であっても、一つの練習の場として、まだ経験の浅い若い学生の研究も多く発表させて頂きました。これらの発表が若い方も含めて、その後の研究の発展の基盤となったと確信しております。

○PMは簡単な論文の発表の場：

日本植物形態学会誌のPLANT MORPHOLOGYは年に1回の発行です。しかし、若い学生も我々も、十分に利用させて頂きました。今過去から現在のものまでを眺めると、「役員」「論文」「総説」「学会賞受賞者ミニレビュー」「受賞理由」「日本植物形態学会大会発表要旨」「大会について」「研究技術紹介」「研究室紹介」「研究費情報」「会長挨拶」「事務報告」「会計報告」等があります。またネットでも配信されています。編集委員会の先生方は大変だったと思いますが、20年前に掲載された「研究技術紹介」の内容を見ますと、現在引き続き使われているものも多く、執筆された方々は最先端の技術を使い研究され、それを真摯に紹介してくれていたのだと思います。その他の論文や総説も、また学会賞受賞者ミニレビューを読んでも、それぞれの方の研究に対する真摯さが伝わり、大変気持ちの良いものです。更に最近の研究論文など読むとその質の高さに驚かされます。

○Atlas of Plant Cell Structure の Springer からの出版：

2014年に野口哲子先生が会長の時にSpringerより「Atlas of Plant Cell Structure」(Tetsuko Noguchi・Shigeyuki Kawano・Hirokazu Tsukaya・Sachihiro Matsunaga・Atsushi Sakai・Ichirou Karahara・Yasuko Hayashi Editors)が出版されました(図9)。内容が藻類から高等植物まで広範にわたっており、どの写真も大変美しく、素晴らしいの一言に尽きるものです。今でも時々見て参考にさせて戴いております。

○Cyanidioschyzon merolae A New Model Eukaryote for Cell and Organelle Biology の Springer からの出版：

2018年Springerより「Cyanidioschyzon merolae A New Model Eukaryote for Cell and Organelle Biology」(Tsuneyoshi Kuroiwa・Shinya Miyagishima・Sachihiro Matsunaga・Naoki Sato・Hisayoshi Nozaki・Kan Tanaka・Osami Misumi Editors)が出版されました(図10)。多様な分野の研究者の支援を得て、細胞・細胞小器官(オルガネラ)の分裂/増殖

と遺伝の研究に、最適な研究材料としてシズンを使い成果を得た内容を纏めた構造生物学や合成生物学にも役立つ本となると自負しています。

○日本植物学会との連携、雑誌「遺伝」、日本植物形態学会誌(Plant Morphology)、そしてそれを基盤に韓国講演など：

2016年に沖縄で開催された日本植物学会で、シンポジウムを河野さんと、河地正伸さんが立案され、講演者の一人に加えて頂きました。その内容は後に生物の科学「遺伝」71、2017に「微細藻類の多様な魅力：分類、進化、ゲノムから形態、藻類バイオまで」河野重行、広瀬侑、野村真未、加藤美砂子、大田修平、粕山祐一郎、黒岩常祥、河地正伸として紹介され、更に2017年にPlant MorphologyにInvited Reviewの特集としても書かせて頂きました。

今、9月に韓国での講演を頼まれましたが、これらの総説が資料づくりに非常に参考になり、提出資料にもPlant Morphologyからの引用を明記しています。

学会が創設されてから、30年を経て、このように利用できるのは夢のようです。この学会を基盤に、私達も多くの方々と素晴らしい成果を、協調的喜び、楽しみをとおして挙げる事ができたと思います。多くの皆さんの研究がこれを基盤に更に発展されることを期待しています。

图1 日本植物形态学会 準備委員会 岡崎

1987.1.10

日本植物形态学会 準備委員	東大・教養・生物
原 襄 氏	根好大・理・生物
植田勝乙 氏	熊本大・理・生物
小野莞爾 氏	東大・理・植物園日光分園
加藤雅啓	基研・細胞機構
黒岩常祥	北大・低温科学研
佐藤利幸	山口大・理・生物
三戸信人 氏	名大・医・付属歯研
田中健右	広島大・理・植
田中隆荘	基研・細胞機構
長田敏行	徳恵医大・生物
新津恒良	

基礎生物学研究所

福田泰二 氏	千葉大・教養・生物
坂輝三 氏	筑波大・生物科学系
増大恭次郎	高小大・理・生物
村上悟 氏	教養・生物

基礎生物学研究所

黒岩様

形態学会 のついで、11.3.3 (2)のつく時期のついでに  
ついでに同封のものを用意しました。

お金の12打合せ(15日)のついでに、お金のついでに  
ご挨拶のついでに、ついでに、お金のついでに、お金のついでに。

同封の鉛筆書きのついでに、お金のついでに、お金のついでに、  
お金のついでに、お金のついでに、お金のついでに。

お金のついでに、お金のついでに、お金のついでに、  
お金のついでに、お金のついでに、お金のついでに、  
お金のついでに、お金のついでに、お金のついでに、  
お金のついでに、お金のついでに、お金のついでに、

お金のついでに、お金のついでに、お金のついでに、

13日(水) 13 - 15:30

14日(木) 10 - 4:40

15日(金) 10 - 1:30

(16日(土) 10:15-12:15に  
ついでに、お金のついでに、お金のついでに、  
お金のついでに、お金のついでに、お金のついでに、  
お金のついでに、お金のついでに、お金のついでに、)

お金のついでに、お金のついでに、お金のついでに、  
お金のついでに、お金のついでに、お金のついでに、

お金のついでに、お金のついでに、お金のついでに、  
お金のついでに、お金のついでに、お金のついでに、  
お金のついでに、お金のついでに、お金のついでに、

お金のついでに、お金のついでに、お金のついでに、

1989.10.8

原 襄

-----「日本植物形態学会」設立に向けて-----

今日、植物の形態に関する研究は、蛍光顕微鏡を初めとした光学顕微鏡の発達、急速凍結固定法等、新しい電子顕微鏡技術の開発、TVによる映像撮影と画像解析法の発達、細胞培養技術の高度化などによって大きく影響を受け、著しい変貌を遂げようとしております。これらの技術の発達は、従来の観察技術では得ることのできなかった高次形態に関する情報を、動的、かつ定量的に得ることを可能にしました。また遺伝子工学、細胞工学といった技術及び方法論の発達の結果、植物個体や器官発生の構造形成過程を遺伝子の導入によって調べることができまます。植物の分子生物学や生理学が著しく発展すれば、植物の「形態」に関する情報はこれまで以上に必須なものとして要求されるようになりましよう。従いまして、これまでとかく静物的と考えられて来た植物形態学も、新しい内容を付け加え飛躍的發展が期待されているのが、世界的状況と思われまます。

一方、わが国における植物の形態、構造そしてその機能に関連した分野の研究者は、全国の諸機関でさまざまな研究を行なっています。その対象は器官、組織はもとより、細胞、細胞小器官から分子にわたり、分類学、系統学、生理学、生態学、発生学、遺伝学などあらゆる分野に関連を持っています。技術的にも光学顕微鏡法、電子顕微鏡法、さらには生化学的方法を用い、形態形成、発生、分裂、運動、刺激受容等、植物特有の現象から生物に普遍的な現象に至るまで、基礎的な研究を推進しています。

しかしながら、これらの植物形態学に関連した研究者は、新しい技術や思考の流れを積極的に論議し、実質的な相互の交流を行なう適当な場を持っていません。総合学会的な性格を持つ日本植物学会がその唯一の場と思われまますが、その中だけではこれからの植物形態学の発展に対処し、これを推進するための実効ある交流を図ることは不十分な状況にあります。

私ども発起人一同は、このような状況にある植物形態学の研究者相互の交流を図り、実

質的な植物形態学推進のための核となるような場をつくって、その一層の発展を期し、併せて研究者間の親睦を深める必要性を痛感して参りました。従来、日本植物学会の関連集會として、植物形態学会、植物細胞生物研究会、微細構造談話会があり、それぞれ固有の活動をして参りましたが、昭和60年の植物形態学会の集會を足掛りとして、私ども発起人が参集、協議し、これらを総合的に一つにまとめ、「日本植物形態学会」を設立しようという結論となりました。

「日本植物形態学会」設立の趣旨を充分にお汲み取り頂き、新しい植物形態学の発展に向けて、学会へのご参加、ご協力を頂きたく、宜しくお願い申し上げます。

発起人一同

- |      |       |       |       |      |       |      |
|------|-------|-------|-------|------|-------|------|
| 秋山 優 | 石川依久子 | 伊藤道夫  | 井上 勲  | 井上 寛 | 今市涼子  | 上木勝司 |
| 植田勝巳 | 植田邦彦  | 植田利喜造 | 内海俊策  | 江原友子 | 大隅正子  | 太田敬久 |
| 岡村はた | 長船哲斉  | 小野宗爾  | 笠原基知治 | 加藤雅啓 | 金子堯子  | 上條明雄 |
| 河野重行 | 北川尚史  | 黒岩常祥  | 小林幹夫  | 犀川政稔 | 堺 弘介  | 坂口修一 |
| 佐藤七郎 | 佐藤利幸  | 三戸信人  | 島袋敬一  | 菅井道三 | 杉原美德  | 鈴木孝仁 |
| 鈴木三男 | 関 太郎  | 世羅敬哉  | 相馬研吾  | 相馬早苗 | 高相徳志郎 | 高尾昭夫 |
| 高尾静代 | 高橋正道  | 竹久 慎  | 武丸桓雄  | 田中一朗 | 田中健治  | 田中陸莊 |
| 角田修次 | 中沢信午  | 長島秀行  | 長田敏行  | 中田政司 | 中村宗一  | 新津恒良 |
| 新居直祐 | 西尾康三  | 西野栄正  | 根平邦人  | 根本泰行 | 野口哲子  | 著本春樹 |
| 原 稟  | 馬場三吾  | 日詰雅博  | 平野 正  | 広川秀夫 | 福田泰二  | 藤田哲夫 |
| 宝月岱造 | 星野卓二  | 堀 輝三  | 増田恭次郎 | 松島 久 | 三木 子  | 三田高志 |
| 宮川 勇 | 宮田町子  | 宮村新一  | 村上 悟  | 矢沢静江 | 山田義男  | 吉田 治 |
| 吉田吉男 | 和田アイ子 |       |       |      |       |      |

図3 日本植物形態学会 趣意書

## 日本植物形態学会会則

### 総則

- 第1条 本会は日本植物形態学会 (The Japanese Society of Plant Morphology) という。
- 第2条 本会は植物形態学の発展と普及を図り、あわせて会員相互の親睦を深めるを目的とする。
- 第3条 本会は前条の目的を達成するために会報等の出版物の刊行、講演会など、そのほか必要と思われれる事業を行なう。

### 会員

- 第4条 本会の会員は次の2種とする：通常会員・団体会員。
- 第5条 通常会員とは所定の会費を納める者をいう。
- 第6条 団体会員とは所定の会費を納める団体をいう。ただし、団体会員は本会役員を選出・被選出にかかわる権利を持たない。また、第20条に定める会員の権利のうち、本会の刊行物の配布にかかわる権利のみを有する。

### 役員

- 第7条 本会には次の役員を置く：会長1名・幹事若干名・評議員若干名・編集委員長1名・編集委員若干名・会計監査1名。
- 第8条 役員は会員の中から選出し任期は2年とする。
- 第9条 会長は全会員の投票により就任の前年度中に選出される。その際評議員は若干名の候補者を推薦することができる。会長は引き続き3期選出されることはできない。
- 第10条 評議員は全会員の投票によって選出される。評議員は引き続き3期選出されることはできない。なお会長および会計監査は評議員を兼任することできない。
- 第11条 幹事・編集委員長はいずれも会長が委嘱する。会計監査は会長が評議員会にはかり、委嘱する。編集委員は編集委員長が選出評議員会にはかり、会長がこれを委嘱する。
- 第12条 会長は会務の全体を統括する。編集委員長は会報の編集に関する一切の責任を負う。幹事は庶務・会計・選挙管理など日常の会務を行なう。会計監査は会計を監査する。
- 第13条 評議員会は評議員会を構成する。評議員会は会長の諮問の範囲で本会の要務を審議する。
- 第14条 編集委員会は編集委員会を構成する。編集委員会は編集委員長の諮問の範囲で、会報の編集に関する要務を審議する。
- 第15条 会長は必要に応じて特定の委員会を設けることができる。委員会の任務、委員の選出方法・任期等は評議員会が定める。

### 会計・会費

- 第16条 本会の会計年度は1月に始まり12月に終わる。
- 第17条 通常会員の会費は年1000円とする。団体会員の会費は1口年10000円とする。

### 総会・講演会等

- 第18条 本会は原則として毎年1回総会を開き、会務を協議し議決する。なお会長が必要と認めた場合に臨時総会を開くことができる。
- 第19条 本会は総会の時、研究発表及び講演会などを行なう。このため臨時の役員を置くことができる。臨時の役員は会長が委嘱する。

### 会員の権利・義務

- 第20条 会員は会合に出席して講演をし、議事に参加し、会報に投稿することができる。また定期刊行の会報は無料で配布を受ける。ただし、その他の刊行物の配布方法は評議員会の議を経て決定される。
- 第21条 会員が退会しようとするときは、そのことを本会に通知しなければならぬ。ただし既に納めた会費は一切これを返さない。通常会員および団体会員が会費を滞納したときは直ちに前条の権利は停止され、1か年以上滞納したときは除名されることがある。

### 会則変更

- 第22条 本会の会則を変更するには総会または臨時総会でこれを協議し、出席会員の3分の2以上の同意を得なければならない。

### 付則

- この会則は昭和63年1月1日から実施する。
- 昭和63年1月1日からの会長と評議員については選挙方法を昭和62年に筑波で開催される「日本植物形態学会」設立総会で決定する。
- 最初の評議員のうち、別に定める申し合わせにより約半数は引き続き2期選出されることは出来ない。この付則 2.3は昭和65年1月1日をもって、申し合わせ3とともに削除する。

### 申し合わせ

- 役員の定数は当分下記の通りとする。  
会長 1、評議員10、幹事 2 (庶務、会計)、編集委員長 1、編集委員 2、会計監査 1。
- 会長の選挙は単記、評議員の選挙は10名連記で、全会員の郵送による無記名投票によっておこなう。
- 最初の評議員をアイウエオ順にならべて番号を付し、偶数番号の評議員は引き続き2期選出されることができない。

図5a 第1回日本植物形態学会 開催 岡山

日本植物学会第53回大会  
研究発表プログラム

(岡山 1988)

学芸会長 千原光雄  
大会会長 武丸恒雄

会期：10月13日～10月15日

会場：岡山大学 教養部・学生会館

岡山大学津島キャンパス案内図

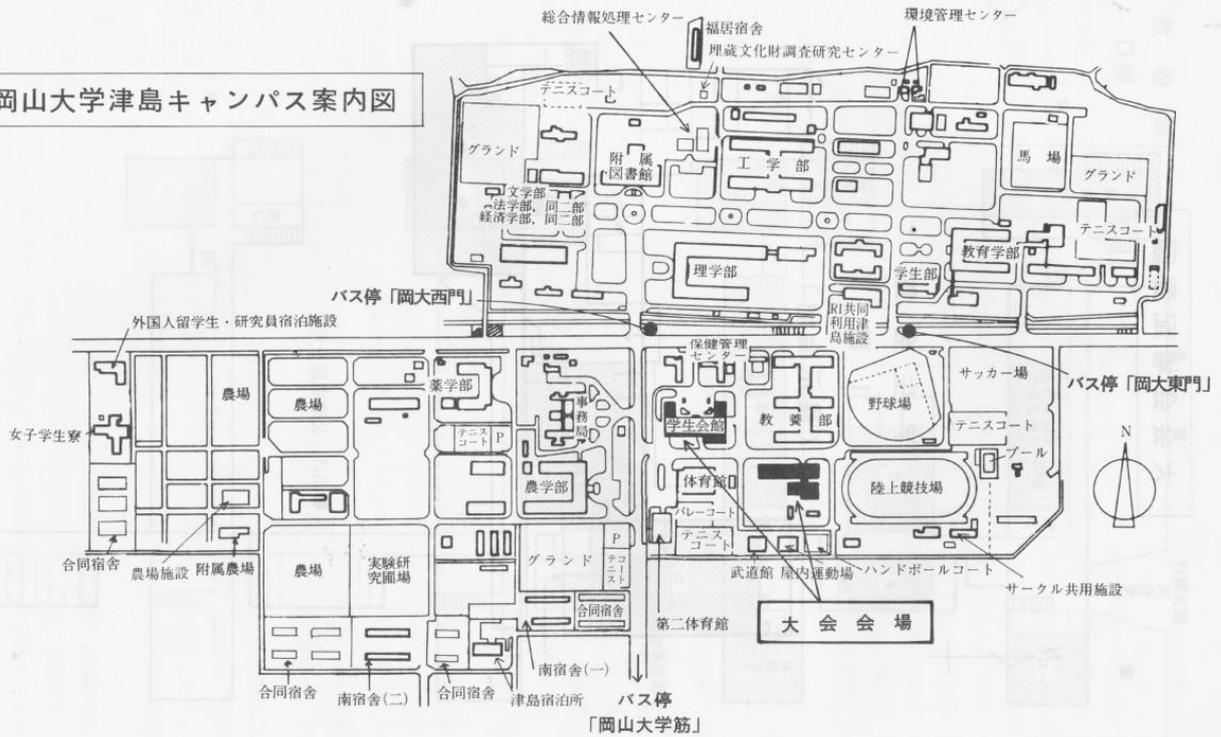




図6 科学研究費申請 総合研究A理学 生物学 植物形態分類学 (代表者 堀輝三先生)

総合(A)一1

平成2年度 総合研究(A) 研究計画調書 (新規)

注1. 別添平成2年度総合研究(A) 研究計画調書作成・記入要領(様式)を参照してください。

総合研究(A)	審査希望部門	部	分科	細目	細目番号	系	広領域
	理学	生物学	植物形態分類学	454		系	広領域
研究者	氏名	堀輝三	所属機関	筑波大学理学部	学位	理学博士	植物形態分類学
代表者	氏名	堀輝三	所属機関	筑波大学理学部	学位	理学博士	植物形態分類学
研究課題	植物における生殖細胞分化に関する分子細胞生物学的研究						
研究年度	研究経費	設備品費	消耗品費	旅費	謝金	その他	
平成2年度	11210	1450	7110	1340	650	660	
平成3年度	815	355	5600	1390	850	620	
平成4年度	4920	0	2400	1200	500	820	
総計	24945	1805	15110	3930	2000	2100	
この研究課題で従受けた補助金額				昭和62年度	昭和63年度	平成元年度	
				0	0	0	

注2. 所属機関の研究分組は、本研究計画に直接関係するもののみ記入してください。

氏名	研究分組	学位	夜間	割合	分担	平成2年度研究経費
堀輝三	植物形態分類学	理学博士			植物の生殖細胞分化	1510
黒岩崇祥	筑波大学理学部	理学博士			生殖細胞分化	920
新津恒良	筑波大学理学部	理学博士			生殖細胞分化	900
田中一朗	筑波大学理学部	理学博士			生殖細胞分化	1000
石川敏子	筑波大学理学部	理学博士			生殖細胞分化	950
本村泰三	筑波大学理学部	理学博士			生殖細胞分化	850
松田吉弘	筑波大学理学部	理学博士			生殖細胞分化	900
中村京一	筑波大学理学部	理学博士			生殖細胞分化	800
奥田一雄	筑波大学理学部	理学博士			生殖細胞分化	830
市村輝直	筑波大学理学部	理学博士			生殖細胞分化	800
植田勝巳	筑波大学理学部	理学博士			生殖細胞分化	950
原慶明	筑波大学理学部	理学博士			生殖細胞分化	800
12名						11210
総合研究(A)	研究代表者名	堀輝三	所属機関	筑波大学	研究分組番号	454
						12102

注3. 欄外の欄は所属機関において記入してください。

班員各位へ

年の瀬も迫り、何となく寂しい日々を過ごしているところです。先日は、平成2年度文部省科学研究費・総合研究A編成に御協力下さいましたこと、心より御礼申し上げます。皆様の手協力が、より同誌A編成(申請者の一人分の外)のよりよい掲載を提言いたしました。もし他頁の詳細を告知りに知りたければ、コピーを御返送ください。各人の異議もあれば、お知らせください。もし本申請の採択の際は、本都経費を除く諸費は、均等に分担していただき、よろしくお願い申し上げます。

向察の所、御身体に御留意下さい。また、お自身の研究の御発展を祈り申し上げます。

敬々

平成元年十二月十二日

堀輝三

代表者

筑波大学

日本植物形態学会会員名簿

1995年12月31日現在 会員数252名

急に暑く(4月)、身体の方が寒工に罹れてはいないもので、一層  
 寒く感じることがよくある。あつてはストーブを出してはいる  
 ます。大抵は組合の専攻で、29日/日から、スチーフを出入  
 するにたいして、我運転がなりました。昨夜は1時時に  
 (1)が1700に100位稼りました。20300mに在りて直白  
 です。  
 形態学会の件は聞くと、東医大の長船氏より、大会  
 費の名簿作成用書類を送って来ました。当日出た花水  
 色にたいしては、同封したものを送りました。氏はエフ  
 ー17研究会の活躍している中に入っています。  
 赤尾とてご連絡下さい。

〒930 富山市五福3190  
 富山大学理学部植物学教室  
 増田恭次郎 探四恭次郎

11月15日

日本植物形態学会会員

氏名 長 船 哲 齊  
 所属 東京医科大学微生物学教室  
 電話 351-6141(内線242)

主な研究 テーマ (1) 緑色細胞における細胞核と孔カウの相関。  
 (2) ユーグレナ細胞の同調培養。  
 (3)

主な研究 単細胞微細藻類(ユーグレナ, クラミドモナスなど)  
 材料

その他

日本植物形態学会会員名簿

氏名	所属機関	住 所	電 話	研究の 内 容
青木 茂治 Maki Shigeji	日本医科大学 新田南学部 総合研究センター	〒651 新田南 浜田町 1-8	電話・ファックスリサーチ Tel 052-267-1000 (4520) Fax 052-267-1334	ヒト植物性異源 二野性異源の細胞生物学。特 に母体代母とミトコンドリア について
紅 明彦 Akashi Tomohiro	名古屋大学 医学部医体細胞研究施設 医体研究	〒466 名古屋市中村区 藤森町 65	Tel 052-741-2111 (46317) Fax 052-731-9479 e43187@nuioc.cc.nagoya-u.ac.jp	形態形成・細胞分化・細胞運 動
瀬尾 茂明 Atsumi Shigeaki	兵庫教育大学 自然系	〒723-14 加東郡 社町下入米 542-1	Tel 0795-44-1101	細胞分化・形態形成・植物生 長物質
栗野 久男 Aino Hisao	十文字学園女子大学	〒523 新津市 普沢 2-1-28		キク科 植物の細胞遺伝学・核 DNAの分化
賀 哲文 Ariga Hirofumi	北海道大学 理学部附属 細胞研究施設	〒051 宮城県 母恋町 1-13	Tel 0142-262-2846 代 Fax 0142-264-4335	植物細胞の細胞生物学 動物細胞の動物細胞生物学 植物の分化
梅田 泰行 Kusuda Taiji	新潟大学 理学部 自然環境科学科	〒951-85 新潟市 五十嵐 2-1-20	Tel 055-262-6370	植物の分化・ゼラチン 細胞生物学
石川 尚子 Shiwa Naoko	東京理科大学 生物学教室	〒158 小金井市 野井北町 4-1	Tel 0425-24-0111 (42605) Fax 0425-24-0832 hokuh-gakugei.ac.jp	植物細胞の細胞生物学 動物細胞の動物生物学 植物の分化
石川 尚子 Ishiyama Naoko	生命科学研究 成瀬町 1-1 新井町 1-1	〒500 成瀬町 新井町 1-1	Tel 0756-81-0733 Fax 0756-81-0737	植物細胞の細胞生物学 動物細胞の動物生物学 植物の分化
石川 尚子 Ishiyama Naoko	神田食品研究所	〒163 新井町 宮比町 13		ミトコンドリア・ヌクレオ チド

平成5年11月19日

日本植物形態学会  
会 員 各 位

〒182 東京都調布市国領町8-3-1  
東京慈恵会医科大学  
生物学教室内  
日本植物形態学会

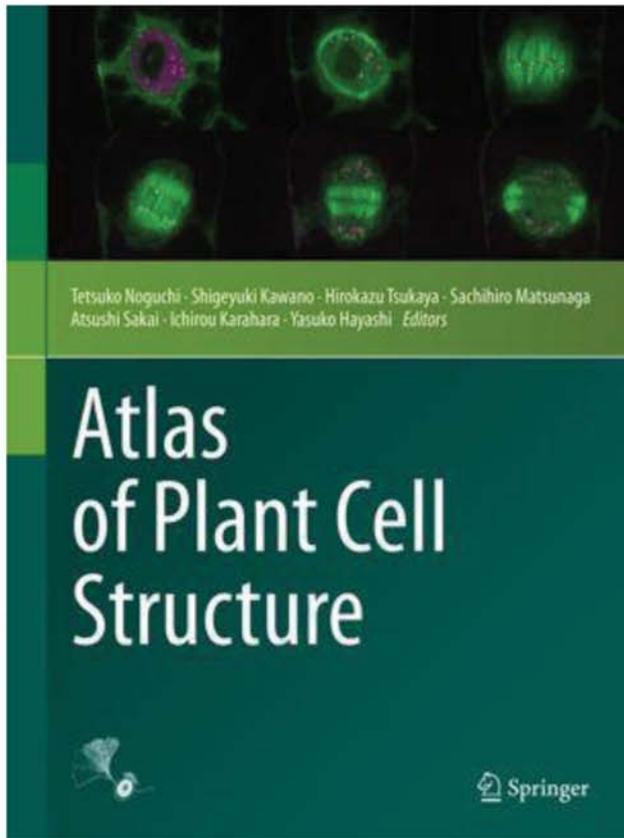
### 日本植物形態学会役員改選について

本学会も設立して6年を経過し、学会誌も本年からNo2を発行することになりました。

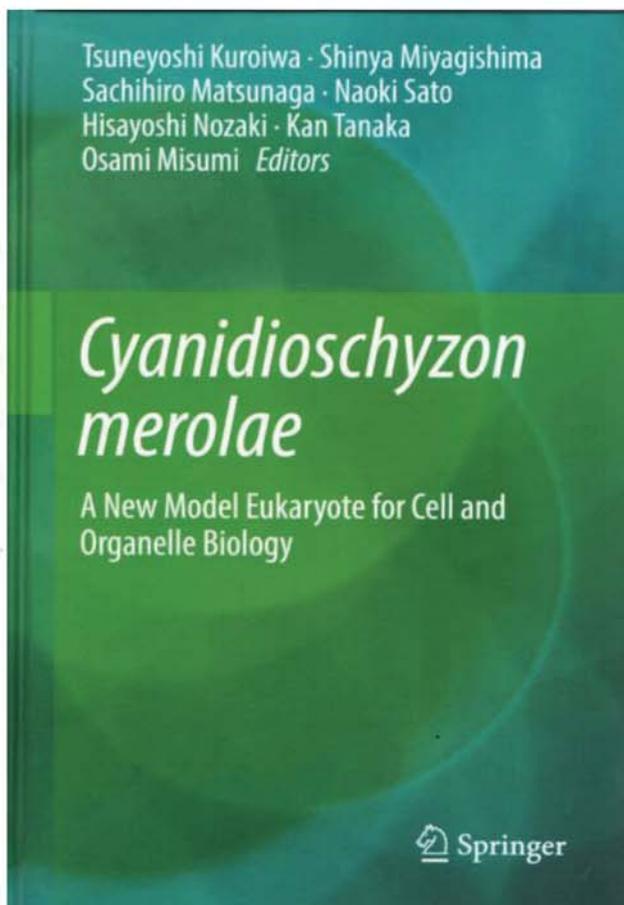
このたび、本学会会則第9条および10条により、次期会長（平成6年1月1日～平成7年12月31日）と評議員（会長と任期は同じ）の選挙をおこないます。次の要領にしたがって全会員のご投票をお願いいたします。

#### 記

1. 会長選挙：会則第9条の規定により、評議員によりつぎの3名の方が候補者として推薦されました。  
〔黒岩 常祥 ・ 福田 泰二 ・ 堀 輝三〕（敬称略）  
ただし、これ以外の方を投票されても、もちろん有効です。
2. 評議員選挙：会則第10条により、つぎの現評議員は引き続き3期選出はできません。  
大隅 正子、長船 哲斉、三戸 信人、田中 健治（敬称略）  
上記以外の会員（同封の会員名簿参照）にご投票ください。  
（10名連記）
3. 会長候補者と評議員候補者に同一名を記入しても有効です。
4. 評議員候補者として同一名を連記したときは、1票だけを有効とし、以下は無効票とします。10名連記に10名未満しか記入しないときは、記入しない欄は白票として取り扱います。
5. 投票は同封の所定用紙にご記入ください。それ以外の用紙での投票は、無効となります。
6. 投票用紙は所定の欄にのり付けし、同封の封筒に入れ、密封の上、封筒に記名して送付してください。  
（平成5年12月15日（水）消印まで有効）
7. 開票は平成5年12月18日13時から、東京慈恵会医科大学国領校で、別に選定した立会人のもとで行います。会員は、開票に立ち合うことができます。



☒ 9 Atlas of Plant Cell Structure  
Springer



☒ 10 Cyanidioschyzon merolae  
A New Model Eukaryote for  
Cell and Organelle Biology  
Springer

## Plant Morphologyのリニューアル ～日本植物形態学会の一層の発展を願って～

2004年-2007年度 編集委員長 鮫島 正純  
(NPO法人総合画像研究支援会員)

日本植物形態学会設立集会の折り、黒岩先生が確か、とりあえずは10年を目指しましょうと決意表明されたことを思い出します。10年どころか30年を超え、感無量です。設立後、10数年を経るうちに、日本植物学会の前日開催という運営形態ゆえに、サテライトミーティング的な気分がもたらされ始め、それではいけない、“ちゃんとした学会”へ成熟させようとする機運が高まったと記憶しています。そして2005年に当時の第6代河野重行会長から形態学会将来計画WGへ諮問があり、翌2006年に最終報告(資料1)が答申され、そこでは、学会誌Plant Morphologyにもふれています。

時期は少しさかのぼりますが、2004年だったと思います、河野会長から学会誌の編集を担当するように依頼されました。私はその前年に、東京都臨床医学総合研究所(現東京都医学総合研究所)から弘前大学農学生命科学部に転出したばかりでまだまだてんてこ舞いしている最中でしたが、上述した“機運の高まり”に乗せられて、お引き受けいたしました。幸い、宮沢豊先生(現山形大)が当時すでに東北大に、また弘前大には着任されたばかりでしたが福沢雅志先生がおられたので、私を含めた3人で編集委員会を立ち上げました。

この編集委員会では2点の課題を設定し、そのうち学会誌の体裁の問題を最優先としました。それまでは、1頁1段組であったため、立派な内容の論文が、見た目はいわばレポート的な体裁であることから、会員から改善の要望が出ていました。この改善は“ちゃんとした学会”へ成熟するために必須な過程でした。宮沢先生の記憶と記録では、当時の投稿規定では、「・・・タイプライターやワードプロセッサを使用したものに限る」という文言があり、さらに送られてきた最終稿をダイレクトに印刷していたので、論文によってフォント(特に欧文フォント)や1頁の行数がバラバラだったという問題点もありました。1巻が発行された1989年にはまだパソコンが普及しておらず、さらに、なるべく経費をかけずに学会誌を発行せざるを得ない状況では、致し方のないことでした。

しかしその後のワープロソフトの進歩により、2005年当時はすでに、だれでも自在にページ割り付けができる環境にありました。そこで、学術論文の体裁である、1頁2段組にリニューアルすることにしました。さらに、編集委員の負担軽減も兼ねて、会員自ら1頁2段組の体裁で投稿していただくように変更いたしました。そのためのフォーマットを宮沢先生と福沢先生に作成していただき、投稿者はそれに上書きするだけで原稿ができあがるように準備いたしました。

16巻と17巻はいずれも弘前で印刷しましたが、前者は従来の体裁を単に引き継いだものですが、後者は翌年リニューアルした体裁で印刷しました。植物形態学会HPで、学会誌、そしてJ-STAGEへと進んでいただき、16巻と17巻の論文のPDFを開いて比較していただければ、その違いがおわかり頂けるでしょう。これによりレポート的論文から科学論文への転換ができました。

また、もう一つの問題は、雑誌の奥付に記載された発行年と実際の発行年が乖離しており、実際の発行が大幅に遅れていたことです。それを解消するために、実際は毎年発行し続けたのですが、奥付の発行年を1年スキップし、さらに19、18巻を合併号にして帳尻を合わせました。J-STAGEの巻号一覧をご覧になると、それがわかります。

その後の編集委員会・委員長のご努力の結果、投稿原稿作成方法が簡便化され、より投稿しやすく、よりよい学会誌となっております。ただ一つ残念なことは、その当時から現在も、オリジナル論文の投稿が多くない点です。研究は論文にすることにより初めて時代を超えて人類の“智”として残ります。どんな些細なことでも後世に残しておくことが科学者の責務です。学生会員の方々も、是非活用して下さい。

(資料1)

形態学会将来計画WG最終報告

2006年9月13日

文責：峰雪芳宣

メンバー：峰雪芳宣（兵庫県立大）、鮫島正純（弘前大）、坂口修一（奈良女大）、  
塚谷裕一（東大）、東山哲也（東大）、泉好弘（大分大）、長里千香子（北大）

<議論内容まとめ>

会長から依頼のあったA~Dのテーマに、WGメンバーから提案のあったテーマEを加えて、メールで議論し、2005年度の大会で、中間報告を出した。2005年度大会の晩、河野会長、田中庶務幹事を加えて、一同に会して議論した。その後、メールで議論し、最終報告を仕上げた。特筆すべき点として、Webの有効利用が、どの目的にも必要であることで、意見が一致した。

議題

- A. 学会の独立について
- B. 学会の新たな目標について
- C. Plant Morphologyの編集と運営について
- D. 学生や若手研究者に入会を薦める方法
- E. 形態学会のWebのありかた

以下、上記のテーマごとに、報告する。

A. 学会の独立について

現段階では、植物学会から独立して大会等を行うことは難しいことでほぼ意見が一致した。ただ、将来どうか、また、学会の存在意義については、今後諸般の状況を考慮して判断することが必要と思われる。

B. 学会の新たな目標について

1. 学会の目標

植物形態学会が独自の発展をするには、植物学会や植物生理学会の様な大きな学会ではできない、植物形態に関する研究、教育などの情報の場になることが必要と思われる。

2. 具体的な提案

どうすれば形態学会を発展させることができるかと言う観点から議論を行い、今後行って価値のありそうな方策として下記の様な提案が出た。

(1) 以前のGFPシンポジウムのように、企画ものの簡単なシンポジウムを時々独立に行う。

(2) 植物形態学会の提案で開催しているシンポジウムを、植物学会のJPR symposiumの形で、「良い」総説集を組む。

JPR symposiumでは、それぞれの責任編集者の短い総括を載せることができるので、そこで形態学会としての位置づけをある程度明らかにできる。日本人だけで企画したJPR symposiumでも、例えば2001年については7回引用1人、6回引用1人、3回引用2人、1回引用2人と、JPRのインパクトファクター（昨年、1.224）から比較してかなりよく引用されている。2002年も7回引用2人、5回引用1人、4回引用1人、2回引用2人で、効果はかなりあると、前向きな意見が多かった。

（3）平瀬賞や奨励賞を受賞された方に、それ以降も積極的にポスター発表などに参加してもらう様呼びかける。

### C. Plant Morphologyの編集と運営

#### 1. Plant Morphologyの位置づけ

形態を主体にした雑誌が少ない状況で、“印刷物にする”ことの利点（priorityの確保）と会員への情報伝達および会員相互の情報交換を目的として発行されてきた。しかし一方では、発行に費やす労力と会費にふさわしいものであるためには、会員以外のなるべく多くの研究者に読まれるように状況を変える努力も必要である。

#### 2. Plant Morphologyの現状

上記の観点に立って編集委員会で、掲載論文を従来の一段組みから二段組に変更し、前号から論文として一般的に認知される体裁が実現した。また、会員相互のテクニカル情報交換向けのテクニカルチップス欄を設けた。原稿の中身は、三賞受賞者関係と大会要旨が主体であるが、各巻1-2編の投稿もある。

発行体制は、固定した編集部は置かず、“適当な”会員に会長が依頼して編集委員会を組織しているのが現状で、担当した会員には労力負担などの問題があるが、小さい学会で年1回発行の現状ではこの体制を続けざるを得ないと思われる。

#### 3. Plant Morphologyの今後

投稿原稿の確保とサーキュレーションの拡大が大事である。

現状ではサーキュレーションは会員に限定されているが、今回の段組変更により外部へのサーキュレートに耐えうる体裁となった。そこで、学会通信や事務的なものはHPに移し（一部すでに始まっている）、Plant Morphology誌の中身をPDF化してWebページで無料公開するのが良いという結論になった。

冊子体を残すか残さないかは、ひとえに、ちゃんとした別刷がほしいか、あるいは自分でプリントアウトしたものでよい、のどちらをとるかによるが、和文総説は別刷の配布など、研究内容の宣伝に便利な長所もある。また、現状では冊子体の廃止が経費削減には直接つながらない（編集長のコメント）様であるが、工夫によりPlant Morphology関連予算をプラス収支に持っていくことも可能との意見も出た。

（参考意見）どのようにして冊子体の廃止により収支状況をプラス側に転じていくか。（10万から20万のできるだけ安い金額で、Word等で投稿された原稿をPDF版に仕上げるようなサービスを行っているとすれば、Plant Morphologyの製作にかかる総額が激減する。著者には編集料とPDF版を自由に配れる権利ということで、必要な分をお支払いいただくことにすれば、これまでの別刷り代よりもだいぶ安くすむと思われる。そうすれば、収支状況がプラス側に転じるように思います。もしそうならば、浮いた分は、ホームページをプロにデザインしてもらうなどの $+\alpha$ の部分に回すことができる）

また、Plant Morphologyの内容については、以下の意見が出た。

- （1）HPの英語版もあると、海外からも覗いてもらえる。また、英文のオリジナル論文をある程度の数掲載できれば、さらに増えるで。そのためにはどうするかが問題。
- （2）底辺の拡大を目標に、Plant Morphologyの内容にセミナー的な内容のものも加える。

#### D. 学生や若手研究者に入会を薦める方法

3賞やポスター賞の宣伝をし、これらの賞に応募することをきっかけに、形態学会に入ってもらい（興味を持ってもらう）のも一つの方法である。また、大会に参加すると、植物学会などではできない深い議論ができるなどのメリットがあることを宣伝するなど、この学会に参加すれば、自分の知りたい植物形態に関する情報が得られると思ってもらえる様な場にするのが重要。

#### E. 形態学会のWebのありかた

Webの重要性は、全員認識しており、昨年度の中間報告での意見が取り入れられHP委員会が立ち上がっている。以下に、公開する項目として現状のWebページにプラスする可能性のあるものを5つ挙げ、問題点などについて説明する。

1. Plant Morphologyの内容のpdfファイル
2. 植物形態関係の画像、ムービーファイルのライブラリー
3. 植物形態学関連サイト（会員個人サイト含む）へのリンク集
4. 一般向け教育ページ（用語解説集、Q&Aなど）
5. 学会の目的、概要を記したページ（会長挨拶など）

1はあまり大きな問題もなく実現できると考えられる。ただ、海外の研究者のアクセスを考えるとWebページに英語版が必要になる。

2に関しては、具体的にどのようにして素材を収集するかの問題がある。会員（とくにシニアの会員）の協力をどの程度上げるか、その体制づくりが鍵となる。また、ファイルの整理やアノテーション、webページ作製の手間もかなりのものと予想される。大変だが、この事業は文化的に価値のあるやりがいのある事業だと思う。本格的なものをめざすとすれば、学会内に“画像データベース”委員会みたいなものを立ち上げたり、なんらかの資金獲得が必要である。

3は、リンクを張る先（とくに形態学会会員のサイトなど本学会ならではのサイト）を十分確保する必要があるが、知りたい項目別（材料別など）にリンクを整理しつつ、現状のリンクページ（今は植物学会へのリンクだけ）を拡充する方向で実現をめざせる。

4は、学会の規模を考えると手間がかかりすぎるのではないかと意見が出るが、植物形態学に興味をもってくれる人の裾野を広げる意味では大切である。

5は、とくに問題なくできる。

以上の項目のほか、こうした事業を行う上で、会員相互が情報交換をおこなえるメーリングリストが運営できるとよい（＝6. 会員メーリングリストの構築）。現在のインターネットの普及状況を考えるとリタイアしたシニア会員を含め結構参加してもらえるのではないかと考える。サーバーの管理や個人情報の管理などややこしい問題があるが、検討に値すると思われる。

以上、項目を羅列しましたが、実際には限られた人的資源、資金内であることなので、その効果を考えつつ優先順位をつける必要がある。一案としては、1, 3, 5はただちに実現に向け作業を開始し、2, 4, 6（メーリングリスト）はとりあえず要検討にする。とくに2と4を一度に両方するのはおそらく無理と思われる。4は植物生理学会（Q&Aコーナー）や植物学会（用

語集)の活動と重複したり反対意見があるので、その意味では2の方が先に手がけるのが良いと思われる。しかし、2も本格的なライブラリーをめざせば一大事業になり、逆に中途半端なものでは役に立たない気もするので、大変さは2以上の可能性がある。6を立ち上げて広く会員の協力を得つつ、2か4のどちらかを実行するようなことができるのが理想？

## 学会設立 25 周年記念事業 ～ “Atlas of Plant Cell Structure” の出版～

第 9 代会長 野口哲子  
(奈良先端科学技術大学院大学 監事)

日本植物形態学会設立 25 周年記念事業として、2014 年秋に Springer 社より、写真集“Atlas of Plant Cell Structure”を冊子体と電子版(eBook)で出版しました。eBook は、SpringerLink (DOI 10.1007/978-4-431-54941-3)で、本全体、また、章単位でも有料でダウンロードできます。

### 写真集の概要

1. Nuclei and Chromosomes (S. Matsunaga)
  2. Mitochondria (S. Kawano)
  3. Chloroplasts (S. Kawano)
  4. The Endoplasmic Reticulum, Golgi Apparatuses, and Endocytic Organelles  
(T. Noguchi, S. Matsunaga, Y. Hayashi)
  5. Vacuoles and Storage Organelles (T. Noguchi, Y. Hayashi)
  6. Cytoskeletons (I. Karahara)
  7. Cell Walls (T. Noguchi)
  8. Generative Cells (A. Sakai)
  9. Meristems (H. Tsukaya)
- ・植物形態学をリードする 92 名の研究者が協力
  - ・植物の細胞構造に関する美しい図版 92 枚 (カラー66 枚) を収録
  - ・藻類、菌類を含む多様な生物の細胞構造を様々な技術を用いて可視化
  - ・図版とその内容に対応する簡潔な解説を見開きで掲載
  - ・英語、228 ページ (本文 202 ページ)
  - ・価格 印刷冊子体 EUR 139.99  
ebook JPY 16,250.00  
Chapter (PDF) JPY 3,411.72

### 出版までの経緯

2012 年 9 月の本学会大会の折、河野元会長との懇談中に“来年は学会設立 25 周年であり、何か記念事業を”とアドバイスされました。そこで、2013 年 9 月 12 日に北海道大学札幌キャンパスで開催された記念大会の評議員会と総会で、学会設立 25 周年記念事業として“写真

集の出版”または“Web上での写真公開”を会長提案しました。総会での議論に基づき、“写真集の出版”に向け、二度のメール評議委員会の審議を経て、記念事業ワーキンググループ委員会を立ち上げました。委員は、2013年度の会長（野口）、酒井敦庶務幹事、林八寿子会計幹事、唐原一郎 Plant Morphology (PM)編集委員長、松永幸大会計監査の執行部全メンバーと、河野重行元会長、塚谷裕一評議員の7名。

11月4日に東京大学理学部2号館で、初の委員会を開催。学会からの旅費支援なしで、全委員が参集しました。学会設立25周年記念出版であり、翌年9月の大会までに出版することを第一条件に、章立て、各章の担当編集者、英語版にすることなどを決め、学会誌PMに掲載された図表や学会での発表等を参考に、写真提供者の候補をリストアップしました。出版社情報の収集などは塚谷委員が担当し、一定部数の買い取り義務がなく、一年以内の出版が最も期待できるSpringer社を第一候補とし、平行して他の出版社との交渉も進めました。交渉に当たっては、見本版の提示は必須で、ワーキンググループ委員会を正式な編集委員会とし、章単位で編集を開始すると共に、11月10日に全学会員へ写真提供をメールで呼びかけました。Springer社のフォーマットによるBook Proposal（松永委員作成）に対し、暮れも押し迫った12月27日にSpringer Japanからレビューアーの意見と出版条件案が送付されました。急遽、1月3日に、編集委員長（野口）と東京近辺在住の河野、塚谷、松永編集委員が東大理学部2号館に集まり、出版条件案を検討しました。問題となった条件は、“カラー印刷（全体の25%まで）は、出版社の負担”と“英文校閲は著者責任”。前者に関しては、塚谷委員とSpringer Japan担当者との面談により、25%以上になるカラーページの原案でも超過料金なしを承諾され、後者に関しては、河野委員により、ZENIS社に許容範囲の料金で英文校閲を交渉でき、Springer社との出版契約に進めました。書籍サイズ（210 x 279 mm : Springer指定）が決定し、1月7日に二回目の写真公募案内（1月14日締め切り）を全会員へメールしました。1月20日に、編集委員長と河野委員がSpringer Japan社を訪問し、担当の平口愛子氏と鹿野好子氏との面談で、写真版スタイルの詳細を詰めました。解説文章の統一は編集委員、写真版の統一は林委員および奈良女子大の鈴木さんと森田さんの奮闘で、2月12日にSpringer社に写真版を入稿し、解説文の英文校閲をZENIS社に依頼しました。英文校閲の前に、解説文中の引用箇所に関し、引用論文等の明示でよいか、自己剽窃になるかの判断に苦慮しましたが、自己剽窃の明確なガイドラインが無いため、対応は各章の編集者に一任しました。しかし、英文校閲した原稿をSpringer社に入稿した3月初め、STAP細胞の論文疑惑に端を発した剽窃問題が大きくなって無視できなくなり、急遽Springer社に原稿の類似度チェックを依頼し、大変詳細なデータを元に改訂しました。

編集委員の精力的な働き、写真提供者の協力、Springer Japan担当者の尽力のお蔭で、2014年9月11日開催の大会で、“Atlas of Plant Cell Structure”二冊を披露することができました。その後、数カ所の修正もあり、正式な冊子販売は11月に開始されました。

## 販売状況

冊子体はオンデマント印刷対応で、絶版になることはありません。冊子体の販売数は公表されていませんが、各章のダウンロード数は以下に公表されており、2019年5月時点で、各章ほぼ同数で約1500/章です。

Springe Bookmetrix “Atlas of Plant Cell Structure” ページ；

<http://www.bookmetrix.com/detail/book/dcf2f6a2-9b28-44bd-823e-1da5bc970e69> (Chapter download 数は、Chapter 単位の購入数に、eBook 購入数、及び、eBook package を購入している機関の無料 download 数を加えた数)。

## 最後に

学会設立 25 周年記念事業として、本学会ならではの素晴らしい写真集を出版できました。企画から一年以内の出版で、編集作業は大学教員にとって博士・修士・学部生の論文作成や入試業務で最も忙しい時期と重なり、編集委員や写真提供者に大変な苦勞を強いました。編集者へは各人一冊の献本、編集者への原稿料（合計 90,000 円）は英文校閲料の一部として使わせていただき、著者への献本・原稿料はありませんでしたが、皆のパワーと情熱の結晶である写真集をとおして、学会員の素晴らしい写真を世界中にアピールすることができました。当時の学会長として、心より感謝しております。

## 日本植物形態学会と IIRS

第 5 代会長 大隅正子

(日本女子大学名誉教授、認定 NPO 法人総合画像研究支援 IIRS)

日本植物形態学会が設立されてからはや 30 年を迎えた今日、そのお陰で植物学分野では、形態学が今も大事に扱われている事を、私は大変素晴らしいと思っている。

分子生物学が注目を浴び、1970 年代の若手研究者の多くが、この分野に飛び込んでいった。その頃のある植物学会の折、懇親会場へ行く道、前を歩いておられる先生方の会話が、私の耳をとらえた。「科研費を申請する場会その団体の形態学の分野がなくては、これからどうなる」。この言葉は、今でも私の脳裏に残っている。

その後諸先輩の方々のご努力下、日本植物形態学会が 1988 年 1 月年に創立された。そして、機能と構造の研究が一体となって、この学会が発展して来た。

若い頃は私の大学に電子顕微鏡関連の機器がなかったので、各メーカーや他大学を訪れて、それをお借りして少しでも新しい手法で形態学的研究を行いたかった。しかし当時は、教授でないと、電子顕微鏡などの大型機器の設置の申請することは、国立大学でもできなかった。今では若手研究者が自由に大きなグラントを申請できる時代となったことは、本当に喜ばしいと思う。

1957 年に物理学の奥田富子教授のご提案で、その頃東京大学と日本女子大学の教授を兼任しておられた湯浅明先生のご支援もあって、家政学部に中型の電子顕微鏡が設置された。私が教授になってからは、Balzers のフリーズエッチング装置、200 kV 透過電子顕微鏡、Balzers の加圧凍装置を 10 年間に 3 機器を揃え、その他に科研費 A で購入できる大型機器を次々と揃えることができた。

かくして、日本女子大学では 1957 年に中型電子顕微鏡が家政学部設置され、1970 年に大型電子顕微鏡の設置とともに、大学の共同利用室となり、さらに充実することができた。そして、大学に揃えた機器を、少しでも多くの方に使用して頂き、研究が発展すればと思い、私達は勿論、国立大学の方も、新しい機器を使い、電子顕微鏡室に來られた。

定年退職を迎えるに当って、今後はこの分野をどのように発展すればいいかと考え、それは外部の方が利用できる開放された機関を作りたいと思って計画を立て、私は理解者の協力を得て、2004 年に NPO 法人総合画像研究支援 (Network for Integrated Imaging Research Support: IIRS) を創立した。そして IIRS では、活動目的を、①研究・評価の支援事業、②人材育成事業、③普及・啓発事業、とくに可視化技術の普及・啓発、④画像研究の国際協力とした。

当時は新しい時代の生命科学を発展させる上で大きな妨げとなっている原因としては、多くの研究機関では、最先端の可視化装置を利用しやすい研究環境が整っていないことに加え

て、こうした装置を操作するための高度な知識と技能を備えた専門技術者が著しく不足していた。そのため、わが国ではこの分野の機器を必要とする研究を進めることが、益々困難になりつつあった。こうした現状を打開し、可視化技術の利用と普及を図り、また若手研究者の育成を念頭において、IIRS を創立したのである。

そしてその活動の中で、「(一財) 新技術振興渡辺記念会」の科学技術振興調査研究プロジェクトをご紹介頂き、2008 年に「ライフサイエンスに可視化技術と将来展望に関する研究」というテーマで、国内の状況調査と合わせて、峰雪芳宣先生（現当学会長、IIRS 会員）と一緒に Australian Microscopy & Microanalysis Research Facility (ANNRF) を調査する機会を得た。そこで研究機器の共同利用をしている状況を視察して、日本でも同様な機構を実現せねばと思い、IIRS に設立したのが、「微微細形態科学研究装置共同利用ネットワーク (CUMNET)」であり、その後文科省でも「ナノ・プラットホーム」のプロジェクトができ、それが大変成功したと、過日のシンポジウムで文科省の方のご紹介を伺って、嬉しく思った。

IIRS の活動の一部として、2008 年から植物学会で、「ライフサイエンス領域における微細形態計測装置共同利用ネットワーク創設に向けて」などのテーマでシンポジウムを行っているが、第 9 期当学会長の今市涼子先生（IIRS 会員）から、日本植物形態学会との共催で、とのお申し出もあって、2008 年に、当学会との共催として、鮫島正純先生（IIRS 会員）と植物学会で連続して可視化関係のシンポジウムを開催させて頂いている。2008 年の当学会は高知市で開催されたが、その折には植物学会の皆様にご挨拶として電子顕微鏡研究の創世期の大御所であられた濱 清先生をお迎えして基調講演「生体構造と機能を考える」を、「地方大学はどのように関わられるか」を鮫島正純先生、「神戸理研における電子顕微鏡技術支援の取り組み」を米村重信先生・再生化学総合研究センター室長に、「オーストラリアの顕微鏡関連装置共同利用システム AMMRF の視察報告」を峰雪芳宣先生にお願いして開催した。そして、昨今では豊岡公德先生（IIRS 会員）にご協力を頂き、植物学会での IIRS のシンポジウムの開催も定着し、植物分野においては、機能研究は形態の裏付けをもって発展していることに IIRS も貢献していることを、誇らしく思っている。

私は細胞学から細胞生物学へと発展した時代に育ったが、常に構造と機能の両面から研究すべきであるという信念を持って研究してきた。

昨年の IIRS シンポジウムでは、「電子顕微鏡で見る多様な生命現象：究極のオルガネラ研究」、今年は「先端可視化記述による植物解析～見る顕微鏡から捕らえる顕微鏡～」と題して開催させて頂き、今後もこの学会とともに IIRS が継続発展することを祈念する。

なお、昨年の IIRS セミナーでは「日本のクライオ電子顕微鏡の現状と課題」（吉川雅英先生のご講演）では、永田典子先生（当学会幹事、IIRS 会員）のお申し出で、当学会と共催で開催した事も申し添える。

## 日本植物形態学会 30 年史と科研費改革

第 6 代・第 10 代会長 河野重行

(東京大学フューチャー推進機構特任研究員/東京大学名誉教授)

日本植物形態学会には、会長職を 3 期 6 年、庶務幹事も 3 期 6 年と計 12 年の長きにわたって関わってきた。公的にはこの 12 年だが、記録に名前のない些細なことも入れると、形態学会 30 年全般はもとよりその前史にも少なからず関わっていたような気がする。1987 年 1 月 10 日に有志 15 名が岡崎の基礎生物学研究所に集まって、日本植物形態学会（設立）準備委員会を立ち上げたときも懇親会の末席には加わっていたように思う。1988 年 10 月 12 日には記念すべき第 1 回日本植物形態学会が岡山大学で開催されたが、一般教養棟では講演、学生会館ではポスター展示があって、勝手知った母校ということもあって、今では形態学会の伝統となっている「ポスター会場の茶菓」を買いに走った覚えがある。

東京大学の黒岩常祥先生が庶務幹事になられたのは記録上 1990 年だが、それ以前から機関紙“Plant Morphology”や大会案内の発送をしていた黒岩先生を手伝っていたように思う。黒岩先生が会長だった 1994 年から 1997 年までは、私は庶務幹事だったこともあって、年に 2 回、200 通をはるかに超える郵便物を研究室の台車に積んで本郷郵便局まで運んで、当時発生研（黒岩研）の助手だった酒井敦さんや高野博嘉さんなどと手分けして、切手代わりの料金別納スタンプを押したものだ。形態学会の現執行部をみると、庶務幹事の永田典子さん、会計幹事の三角修巳さん、評議員の松永幸大さん、宮沢豊さん、東山哲也さん、宮城島進也さん、広報委員長の佐々木成江さんといった面々は、封筒詰めや宛名貼りを手伝ってくれた学生さん達だった。

2002 年に私が会長になって最初にしたのは日本植物形態学会ホームページを立ち上げることだった。当時、東京大学・大学院新領域創成科学研究科・先端生命科学専攻の植物生存システム分野の秘書だった、狼美保子さんに頼んで作ったものが形態学会の最初のホームページで、初代広報委員長の宮沢さんの報告にもそのように書かれている。そのホームページは、歴代の委員が後日だいぶ手を入れてくれたのだが、2016 年に現行のホームページになるまで 14 年も使われ続けた。私が 3 期目、第 10 代会長になった 2016 年に、この古いホームページを編集しやすいものに変更することを評議員会と総会に提案して、現行のホームページに更新された。現広報委員長の佐々木さんが中心になってリニューアルしているので、形態学会の情報発信も昨今はずいぶん充実している。

昨今といえば、話は変わるのだが、大学への就職などに際してピーアイ（PI）という言葉をよく聞く。PI とは“Principal Investigator”のことで、日本語では「研究室主宰者」などと訳されている。本来は大学の授業や運営などに関わるボス職のことで、ポスドクや大学院生を配下に持つのが普通だ。ボスは、それが大きい研究室だろうと小さい研究室だろうと自分の研究ができる憧れの地位だ。ただ、一方では、論文生産や研究費の獲得と研究室の運

常に全責任を持つことになる。日本では、研究室主宰者の意味でのPIでなくとも、研究費の主責任者であるPIにはなることができる。たとえば、ポスドクは研究室主宰者ではないが、研究費が獲得できればPI的な扱いを受けられる。大学院入試の面接などでも、将来はPIとして研究に携わりたいという受験生は多い。研究者は卵のうちから自分の研究をしたがる。精神的にはある意味みんながPIなのだ。

そんなPIを支えるのが科学研究費補助金(科研費)である。これは文部科学省あるいは日本学術振興会の事業で、人文・社会科学から自然科学まで全ての分野にわたり、基礎から応用までのあらゆる研究者の自由な発想に基づく研究を格段に発展させることを目的とする「競争的研究資金」である。ピアレビューによる審査を経て、独創的・先駆的な研究に助成をすることになっている。研究者としては実質PIであろうが精神的PIであろうが科研費を獲得する必要がある。申請には分野探しがまずその第一歩となる。本企画にある黒岩先生の『日本植物形態学会設立の経緯』を拝見すると、「こうした科研費の項目から見ても、重要である『植物』の項目が失われることを危惧し、(植物形態)学会創立への動きが始まりました。」とある。

科研費の審査委員会は、旧帝大の学部構成そのままに、各専門分科の審査もほとんどがごく少数で行われるような状況だったらしい。それが改訂され現在の形に近くなったのが50年ほど前の1968年の改訂だったが、審査がやりやすいようにとの方針で、伝統的な学問分類法を基礎に各細目が決められていた。当時の学部構成そのままだったので、「植物形態」に加え「植物生理」「動物形態」「動物生理」「遺伝」といった細目もあったように記憶する。分科細目はその分野に対する学問的認知に加え、一定の助成金額が与えられる証と審査される側の研究者は受け止めていた。分科細目表からその分野が消えることは、学問研究の灯が消されるに等しいという思いだった。日本植物形態学会の設立は細目存続への策だったと考えてもいいだろう。ただ、そうした先輩方の思いや抵抗にもかかわらず、1993年には分科細目の大改訂が断行され、「植物形態」は細目から消滅し、「形態・構造」となり、動物と同じグループで審査を受けることになった。

それから10年後の2003年、さらに10年の2013年の大改訂では、「形態・構造」という細目さえ失われるのではという危惧があった。2003年は、私は会長になって2年目だったこともあって、動物形態学分野に関連する日本発生学会や日本内分泌学会の方々と陳情するなど手を尽くした。その甲斐があっただけか、分科細目表から「形態・構造」が消えることはなくてホッとしたことをよく覚えている。ただ、その一方で文科省の科学技術・学術審議会の報告書には、「日本学術会議や学会等の協力が必要と考えられる。そのような協力も得つつ、蓄積した情報をもとに日本学術振興会において審査員を選考することが望ましい。」となっていて、これまでのように学会が審査員候補者を選び、日本学術会議がそれを推薦するというようなことはできなくなった。それまでは日本学術会議に認定された学会には、関連する細目の審査員候補者の人数割り当てが来ていたのだ。

2017年は会長3期6年目の最後の年だったが、2018年には文科省の主導する「科研費審査

システム改革 2018」が予定されており、現行の「分科細目表」を廃止し、新たに「審査区分表」を作成することになっていた。そのパブコメが2016年5月に実施された。科研費の審査は、従来「系・分野・分科・細目表」(細目表)に基づいて行われている。この細目表は、本来、科研費の審査区分を示すものであり、大学の学科や学会の分野などに基づいているものではないが、学術の分類を示すものであるかのような誤解が一部に存在するとされ、細目表が科研費の審査区分であることを明確にするために、現行の細目表を廃止し、科研費の新たな審査区分表が作成されることになった。問題は「植物形態」である。審査区分として「形態および構造関連」はかろうじて残されたが、旧来の「形態・構造」にあった9つ(実質的12)のキーワードから、「動物形態」、「植物形態」、「微生物・藻類形態」などは削除されていた。ついに「植物形態」という言葉が、パブコメ段階では科研費「審査区分表」から消滅してしまったのだ。このパブコメにはさすがに多くの会員の方々が積極的に意見を述べてくれたこともあって、小区分44040〔形態および構造関連〕には、「動植物形態、微生物形態、分子形態、微細構造、組織構築、形態形成、比較内分泌、顕微鏡技術、イメージングなど」と10のキーワードが掲げられていて、動物と一緒に「植物形態」の橋頭堡はかろうじて科研費「審査区分表」に確保されたことになる。この改革は昨年2018年9月の公募(平成30年度助成)分から実施されている。

次の科研費大改革がいつになるかは決まっていないようだ。旧来のサイクルでいえば10年後か15年後だろう。「植物形態」という学問分野がこれからどう発展していくか楽しみである。科研費の審査項目に「植物形態」が堂々と掲載されるよう、若い会員諸氏の奮闘努力に期待したい。翻って見るに、個人的には、「形態学会30年史」は「科研費改革」との戦いだったような気がする。防戦一方だったような気もする。ただ、日本ではPIになるためにもPIを育てるためにも科研費の獲得は極めて重要で、若い会員諸氏のためにも学会は科研費戦略をもっと考え力を尽くすべきだと今でも思っている。

## 日本植物形態学会の更なる発展を願って

第8代会長 今市涼子  
(日本女子大学名誉教授)

日本植物形態学会が30周年を迎えました事、心よりお慶び申し上げます。設立以来の会員として、私も大変嬉しく思います。私は、前会長の田中一朗先生の後を受け、2008年から2011年まで、本学会の会長を務めさせていただきました。その前後を含む数年間は、ちょうど学会の「かたち」が整った時期だったかと思います。2007年、発足以来20年にわたる学会員の皆様のお力やご努力が実を結び、日本植物形態学会は日本学術会議協力学術研究団体に登録され、学会として一人前になりました。学会誌 PLANT MORPHOLOGY も大きく変わりました。2010年に表紙デザインを一新し、中身も2段組にして読みやすくしました。さらに、PLANT MORPHOLOGY 全バックナンバーの論文PDFファイルがJSTウェブサイトで公開になった事は嬉しい事でした。また、それまでのホームページ委員会の名称が広報委員会へと改められるとともに、広報の体制が強化されました。4年間の任期中、まさに「痒いところに手が届く」坂口修一先生が庶務幹事として力を尽くして下さいました。また、会計、編集員会、広報員会の先生方にも多大な労力とお時間を使っていただきました。皆様へ感謝の気持ちで一杯です。

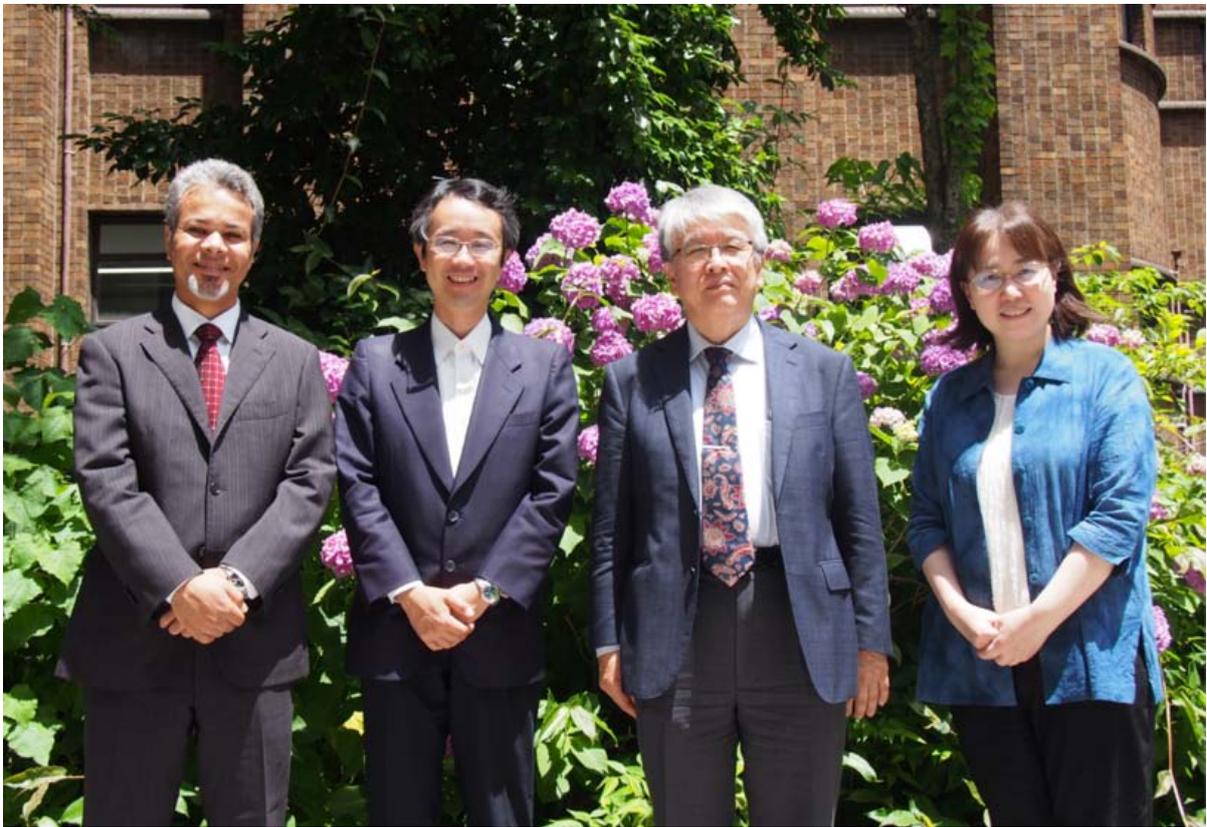
本学会は、植物の「形」を扱う様々な分野の研究者、特に若い研究者の情報交換の場となることをめざして出発しました。小さな学会の良さでしょうか、秋の「大会」は、手作り感満載で、和気あいあいとしていて楽しいものです。ただ、大会を準備する側は結構大変です。私の経験でも、大会当日は時間との戦いで、ポスターセッションまでたどり着いてやっと一息つけた、という感じでした。また、大会後の懇親会も情報交換の場として重要、ということで、懇親会の場所選びや準備に結構な時間と手間をかけたのを懐かしく思い出します。

学会設立時の初代会長を務めた原襄先生は「植物の形態・構造、そしてその機能に関連した分野の研究者が、新しい技術や思考の流れを積極的に議論し、実質的な相互の交流の場を持つ」との趣旨のもと、本学会を作ったと書かれています。私自身は、シダ植物を材料にした組織学から研究を始めましたが、学会設立当時は種子植物も含めた形態多様性に興味をもっていましたので、本学会で様々な実験・観察手法を知ることや、分子から器官まで様々な分野の方々と議論ができることは、大変嬉しい事でした。しかし、私が会長を務めていた頃からでしょうか、様々な植物群を扱う研究者や形態多様性に興味をもつ会員の大会参加が少なくなってきたように思います。情報交換、交流の場として本学会が発展するには、多様な研究分野の方々が集まる必要があるのではないでしょうか。また、現在は、学問の細分化とともに、従来の学問分野の境界を越えた新たな学問分野の創成が期待される時代でもあ

ります。このような状況にあって、本学会が「形」を機軸にしながらも多様な分野を包含するのは大切な事だと考えています。30周年を機に、日本植物形態学会が更なる発展を続けることを願って止みません。

## 日本植物形態学会創立 30 周年記念座談会

日本植物形態学会は 1988 年 1 月に会員 155 名で発足し、昨年（2018 年）には学会創立 30 周年の節目を迎えました。この度、植物形態学会・現会長の峰雪芳宣先生（兵庫県立大）と、現在活躍中の中堅代表としてフェルジャニ・アリ先生（東京大）と松永幸大先生（東京理科大）にお集まりいただき、植物形態学会への愛と、植物形態学会の未来について、自由に語っていただきました。



記念座談会を開催した東京大学理学部二号館前にて（2019 年 6 月 16 日撮影）

永田：皆さま、本日は日本植物形態学会創立 30 周年座談会にお忙しいところお集まりいただき、どうもありがとうございます。

僭越ながら私、永田典子（日本女子大）が本日の司会進行を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願ひします。

一同：よろしくお願ひします。

永田：では、自己紹介を兼ねて、これまでどのような形で、いつ頃からこの学会に関わられていたかなど、お話しただければと思います。まず会長でおられる、峰雪先生からよろしいでしょうか。

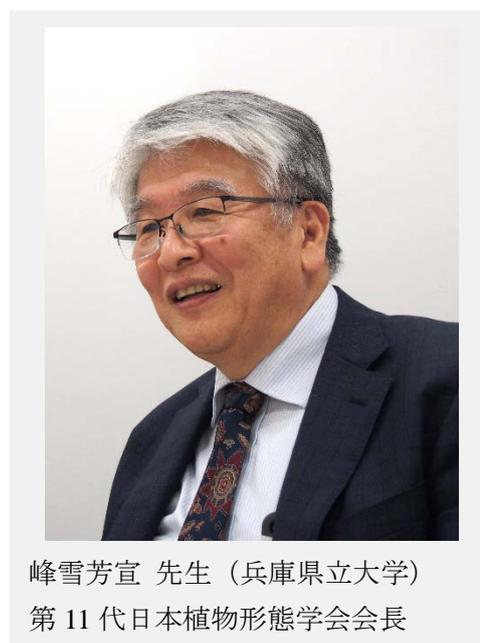
**峰雪**：はい。私が形態学会の会員になったのは平成元年です。形態学会が発足したのは、私が学位を取った後、海外にいた時期だったので、形態学会ができたときのことは知りません。ただ、形態学会を立ち上げるという話をうわさでは聞いていたので、平成元年に日本に帰ってきてすぐに会員になりました。

評議員も結構やっていますが、田中会長のときの 2006 年から 2007 年と、この前の河野会長 3 期目の 2016 年から 2017 年に庶務幹事をやっています。大会のお世話 は 1998 年に広島で行われた第 10 回大会と、2012 年に姫路で開催した第 24 回大会の 2 回経験しています。

私の専門は基本的に細胞骨格と形態形成、その中でも分裂面の挿入位置決定に関与している、分裂準備帯と私たちが呼んでいる装置が、どのように機能して細胞の並びが決まるかを中心にした形態形成の研究をやっています。実際に使う技術はライブイメージングと 3D イメージングが中心です。もともとは電子線トモグラフィをやっていたんですが、最近はもうちょっとマクロなレベルの大型放射光施設を使ったマイクロ CT（Computed Tomography：コンピュータ断層撮影）もやっています。

永田：ありがとうございます。それでは、アリ先生、お願ひします。

**アリ**：はい。フェルジャニ・アリです。4 月に東京学芸大学から東京大学・駒場キャンパスの総合文化研究科に移りました。そうですね、この学会の会員になったのは、実は 2004 年の日本大学・湘南キャンパスで第 16 回の時でした。このときは基礎生物学研究所（基生研）にいまして、塚谷研に学振 PD として入って、シロイヌナズナを触り始めてまだ数カ月で、発表してくださいと（笑）。



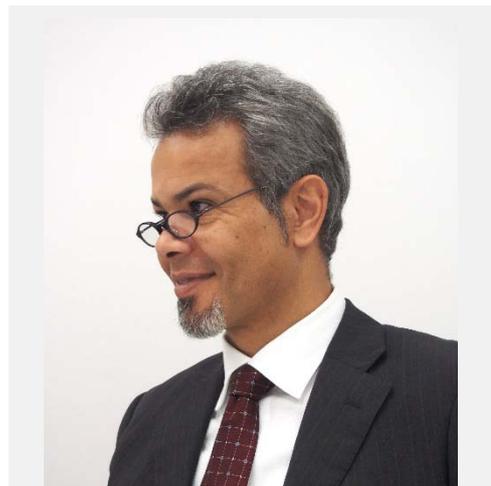
峰雪：すごいね、そんな。

アリ：そんな無茶ぶりに一瞬驚いたんですけど。

峰雪：無茶ぶりや（笑）。

松永：そりゃ驚きます、誰でも。

アリ：それでポスター発表することになりまして、以降ずっと会員ですね。15、16年間ぐらいでしょうか。それから2012年から2013年は日本植物形態学会の広報委員、『Plant Morphology』の編集委員を2年間、それと評議員を2014年から2015年、2016年から2017年の2期に渡ってやらせていただきました。そんなところでしょうか。峰雪先生に比べて長くはないんですが、それでも16年ぐらいのお付き合いになります。



Ferjani Ali 先生（東京大学）

永田：アリ先生、ありがとうございます。それでは、松永先生お願いいたします。

松永：はい。東京理科大学の松永です。僕が入ったのは第7回大会の時ですね。1995年なので、24～25年ぐらい、形態学会にお世話になっております。最近ですと第29回大会を野田キャンパスで行いました。それから4年間会計監査をやらせていただいております。

初めて参加したときの思い出といたしましては、やはり非常に先生と学生の間が近いかなと。ポスター発表していると、近くまで先生が寄ってきてくださって、そのデータに関して直にいろいろコメントいただいて、ディスカッションできるということを初めて知ったのがこの形態学会でした。研究室を持ってからも、多くの学生が会員の先生方からご指導いただいております。非常にいい学会であると思っております。

思い出深いのは、野口先生（野口哲子先生、奈良女子大）が会長を務めていらっしゃったときに、『Atlas of Plant Cell Structure』（植物形態学会25周年事業として2014年に刊行）をシュプリンガーから出版したことです。私も編集で関わらせていただいたんですけども、1人1枚ずつご自慢の写真を出していただいて、解説を付けるという、形態学会らしい書籍を出版することができて嬉しく思いました。



松永幸大 先生（東京理科大学）

## 創設初期の植物形態学会の様子と、ロゴデザインの由来

永田：次は、この学会に対する思いのようなもの、印象深かったエピソードなどをお話しいただければと思いますが、峰雪先生いかがでしょう。

**峰雪**：形態学会には、海外にいた時に設立されたと聞いて、日本に帰ることができれば入りたいと思っていたのと、日本に帰ってきてすぐに、第2回の大会に招待講演で呼んでいただいて、それをきっかけにスムーズに入りました。

その時の大会プログラムのコピーを持ってきました。僕も忘れていたのですが、このときに招待講演で4人しゃべっています。最初が、石川依久子さん（石川依久子先生、東京学芸大）で次が私。ちょうど、私が広島大の助教授に、石川先生が東京学芸大学の教授になられたところだったんですね。それで新津さん（新津恒良先生、慈恵医大）が幹事長で、新しい研究室を開いたのだから2人に喋らそうと考えたらしいです。

**永田**：いいですね、手作り感あるプログラムですね（笑）。

**峰雪**：そして、これが編集委員長だった田中健治先生（当時名古屋大）から何か書けっていうお手紙。

**松永**：健治先生から来てますね。

**峰雪**：それも手書きの。

**松永**：手書きで。



**峰雪**：そういうことで、この時がすごく印象があって。実は新津さんと僕は研究分野的には細胞分裂なので近いんですけども、学生のときは1回だけ顔合わせたぐらいで、お話もしたことなかったんです。それでここへ来て初めてお話しさせていただいてというよりも、むしろ新津先生から、形態学会に入って頑張ってもらいたいからって言っていただいて、話させてもらって、すごく印象に残っています。

**永田**：この当時からポスター会場にお酒はあったのか、覚えていらっしゃるでしょうか？

**峰雪**：あったんじゃないでしょうか。2回目のときはあったとは思いますが、恐らく。

**永田**：なるほど。この当時の学会場の規模は、今と比べてどうでしたか？ 私が形態学会の年表を作ったときに、第2回大会時の会員数が223人で、現在の会員数が250人ぐらいだったので、もともと今ぐらいの規模だったのだらうとは思ったのですが.....覚えていらっしゃるんですか？（笑）。

**峰雪**：あんまりおぼえていません。まだ初期の頃は、植物学会やるときに同じ会場をつかわせてもらったときと、違う場所でやったときがあって。会場が植物学会と異なる時は、長船さん（長船哲齊先生、当時東医大）達がポスターボードをどっかで30個ぐらい用意して、東京都内だとそのボード持って行ってやるっていう形にしていたのは記憶にあります。

**永田**：なるほど。

**峰雪**：僕が日本へ帰ってきた当時は、なんで帰ってきたんだって先輩とかに言われることが多くて、他の学会では居心地悪かったこともあったんですが、形態学会は最初にウエルカム

してくれて、僕はここの学会が一番居心地がいい。ここともう1つ、生体運動合同班会議という集まり、これは筋肉屋さんとか生体運動屋さんの集まりで、植物の人はあんまりいないですが、そこが結構居心地が良くて、いまだにほとんど参加している会になっています。

ついでに1つ、古いエピソードを話します。形態学会の立ち上げのときに、植物関係の偉い先生で反対する人が結構いて、学会誌『Plant Morphology』を作るときに、(植物学会の学会誌である)『Botanical Magazine, Tokyo (現在の Journal of Plant Research)』と競合しては困るという批判がありました。そのとき原先生(原<sup>のぼる</sup>先生、初代植物形態学会会長、当時東京大)は植物学会の国際誌の編集長でもあったので、苦勞されていたようです。それで、『Plant Morphology』第一刊の「発刊に際して」のところにわざわざ書いているんですね。ここに「我が国ではすでに『Botanical Magazine, Tokyo』ほか植物関係の多くの学術誌が出版されています。『Plant Morphology』は、これらの出版物と競合するということではなく、相補的に我が国の植物形態学の推進に役立つことを目指しております。このことをご理解のうえ、本誌の充実・発展にご協力いただきたく、お願い申し上げます」って。これを書いているのは、そのため。

松永：なるほど。

峰雪：これは原先生がかなり苦勞された。ちょっとかわいそうだったので記憶に残っています。あと、このロゴ、(Plant Morphology 誌の表紙を指して)。

永田：ロゴ？

峰雪：これは田中健治先生が初代の編集長だったので、彼のお嬢さんが描いたという話を聞いていて。著作権の問題になったらいけないということで、何かの本(湯浅明「細胞学」1959年、紀元社出版に似たような湯浅先生のスケッチがある)に載っていたイチョウの精子のスケッチを参考にしてお嬢さんに新しく描いてもらって(Plant Morphology 誌のロゴに)表紙にされたということらしいです。



永田：そこからのイラストなんですね。

松永：精子とイチョウの葉を重ねたという話ですか。

峰雪：そうそう。やっぱり日本の形態学だから、一応イチョウの精子っていうことで。

松永：素晴らしいですね。日本が誇る形態学の業績ですから。

永田：『Plant Morphology』誌の表紙にずっとこれが使われてきたので、このイチョウのロゴは形態学会会員の皆さんにとって印象深いですよ、うちの学会を象徴するものです。

峰雪：あの発見っていうのは、当時の日本の、恐らく一番の大発見になると思いますよね。

面白いのは論文は日本語で書いてあるんですね。日本語で書いているんだけど、それをドイツのほうがわざわざドイツ語に訳して出している。外国語でなく日本語で書いてもいい仕事はちゃんと国際的に評価されるんだっていう良い例です。僕どっかに文句言いたいよ（笑）。

永田：そうですね。

アリ：塚谷先生（塚谷裕一先生、東京大）の言葉を借りて言うと、このイチョウの精子の発見は日本の植物科学を世界が認めた瞬間でもあるとおっしゃっています。

永田：では次にアリ先生のお話をいただけますか。

アリ：はい。私が形態学会に初めて参加したときの思い出やエピソードは、先ほど申し上げたとおりですが、博士課程で取り組んでいたシアノバクテリアにおける環境ストレスの研究から種子植物を使った研究に切り替えて半年足らずだったので、本当にドキドキしながら参加したのは覚えています。そのときにイワタバコ科の研究されていた東京大学の西井かなえさんがポスターを見に来てくれました。覚えてらっしゃいますか？

松永：はい。

アリ：彼女のポスターを見たり、彼女が来てくれたり、ああ来てくれてうれしいなっていうのは今でも覚えています。

松永：人が来ると楽しいですね。

アリ：そうですね。そこから基本的には欠かさず毎年、形態学会に出てますね。何でしょう、雰囲気としてはとってもこじんまりしているっていうのは相対的な評価ですけど、十分大きな学会だと思うし、何よりやっぱり参加者の、一見、植物形態学に関わっているように見えても、結構ヘテロな集団で、形態の捉え方とか見ているその目線、角度、スケールが全然違うので、形態学に関連した学会の中でもこれだけ多様性のあるメンバーが集まる学会はなかなかないと思いました。また、分子生物学や遺伝学の話は通じないわけではないので、話しやすかったなっていうのは第一印象的でした。



で、うれしいことに私はまだ当時ポスドクだったので、塚谷先生に推薦していただいて、2009年の山形大会で奨励賞をいただいています。さらに、2013年の北海道大会で平瀬賞を受賞した後、2016年の沖縄大会で私の学生の高橋和希（当時修士2年）がベストポスター賞をいただいて、それで日本植物形態学会の3冠を達成したと嬉しく思っております（笑）。

峰雪：素晴らしい（笑）。

アリ：もちろんその都度励みにはなっています。東京学芸大学で独立してからも、塚谷研、

堀口研（堀口吾朗先生、立教大）と一緒にずっとやってる年に一回の合同セミナーっていうのは、かれこれ15～16年ぐらい続いてますが、それに加えて形態学会は、1年の行事の中でも非常に大事です。私の研究室の学部4年生は合同セミナーで口頭発表をした後、形態学会でポスター発表をして卒研を迎えるっていうのが、われわれのルーチンになってるぐらいです。

松永：いいですね。

アリ：毎年9月に合わせて、学生たちがやってきた卒研の内容をポスターで発表できるように、指導しています。多いときは5～6人ぐらいで参加し、学生たちも結構楽しんでます。その多くは（大学院に進学したとしても）2年後には修士課程を終えて、アカデミックな世界から離れていくのですが、それでも、一度学会っていうものを経験してもらうのは大事ななと思っています。そんなところなので、とにかく形態学会は非常に気楽に参加できる学会で、ハードルがそんなに高くなくて、研究の質よりかは、アイデアとかこれからどういう研究をするのかを議論することを大事にするところが、私の中でも一番かなと、今も思ってます。

永田：今のお話を受けて、私も思い出しました。今でも大会参加の申し込み要項にかかれていますのですが、「まだ未完成でこれからまとめの段階にはいるような研究発表も歓迎します」という文章が入ってるのが、最初植物形態学会に参加したときに、すごくいいなと思ったんです。

アリ：本当にそれがすごくいいところ。サイエンスをするっていうのは、最初からレベルの高い成果を出すことが難しいので、学会デビューへの第一歩を踏み出すきっかけをつくる学会なのかもしれない。学生にとっては自信にもつながる。参加してみて、「ああ、こんなことから、このレベルから始めてもいいんだ」って、そして少しずつレベルアップしていくっていうきっかけを提供してくれる唯一無二の学会と言っても過言ではないと思いますね。

松永：そうですね。

アリ：日本植物学会や日本植物生理学会のことを批判するとかそういうつもりはない。けど、やはりある程度まとまった研究成果でないと参加しにくいと言うところが、ちょっとあるんですよ。

永田：そうですね。『まとまってなくていいですよ』という段階で発表できる場って、なかなかないですよ。

アリ：そうなんです。そういう意味で、形態学会は学生に非常に貴重な機会を提供する場だなと思いますね。

永田：ありがとうございます。では、松永先生、お願いします。

松永：自分自身が形態学会から賞を頂いたのは1998年広島大学で奨励賞をいただきました。このとき、思い出深いのは、広島会場に行くときに、バスの中でたまたま田中健治先生にお会いして、自分の仕事の話しをする機会がありました。先駆者の方々から、いろいろと今後

のアドバイスをいただけるっていうのは、駆け出しの自分にとっては非常にありがたいと思いました。

そのあと、さっきのアリさんのお話にもありましたけれども、うちの研究室の学生メンバーもポスター賞をいただいたりすると、非常に研究に対してのモチベーションが上がるというか、そういった形で非常にプラスの効果があると思っております。

うちの研究室は私立大学で人数が多いので、毎年4年生とM1を中心に、10名近く発表させていただいております。そういった4年生やM1でも発表できるっていうのは、若手が学問を始めて自分の研究成果を発表するっていう一連の流れを経験できる、貴重な機会だと思っております。今後もこの学会は若い学生を受け入れて、皆さんで議論していただける、そういった学会であってほしいと思っております。

## 植物形態学会 25 周年事業 Atlas of Plant Cell Structure の出版

永田：ありがとうございます。それでは少し掘り進んで、さきほど Atlas of Plant Cell Structure の話題がでしたが、学会全体の流れの中で 25 周年企画で書籍を出版したというのは、とても大きなイベントだったと思います。松永先生、結構これ関わられましたか？

松永：はい、関わりました。

永田：何か思い出というか、ここが苦勞したとかありますか。

松永：そうですね、やはり先生方の思い入れの 1 枚ということだと、皆さん非常に送られてきたファイルを見ると、おお、この先生の思い入れの 1 枚はこれなんだということで、非常に印象深いというか、また違った普段のポスター発表や講演ではうかがい知れないところを知ることができて、非常に貴重な経験になったなというふうに思っています。例えば電子顕微鏡が非常に思い入れの方もいらっしゃるれば、蛍光顕微鏡の写真に思い入れがある方もいらっしゃるということで。さまざまな自分が今まで活用してきた技術、それから自分がここぞと思った発見ですね。これぞと思った発見を示してくださったので、非常にいい企画だったなというふうに思っています。

永田：写真が主体で大きく 1 枚あり、補足が少しだけ付記されるという、あのスタイルは最初お聞きしたときに「お？」って思いましたが、これはどなたのアイデアだったんですか？

松永：これは野口哲子先生のアイデアですね。

永田：このアイデア、すごくいいですね。本を書くと言ったら、だいたい寄稿の論文集みたいなものが多いですけど。

松永：今だとネットで落とせますけど、本という形でただパラパラめくって 1 枚 1 枚で完結できますから。そういった形で植物形態学をオーバービューする面でも、非常にいい本だなと思っております。

永田：売れてるんですかね（笑）。

松永：ダウンロード回数がすごいです。

アリ：昨日もちよっとネット見たら確か 13,000 回（2019 年 6 月 15 日時点）。

永田：素晴らしいですね。

松永：以前、僕もシュプリンガー社から統計をいただいたんですけども、世界中からダウンロードされておりますので、日本の植物形態学会から出版した本が、世界の植物サイエンスの研究もしくは教育にもよく使われていて、良かったなと思っています。

## 植物形態学会とはどのような学会か

永田：では、次の質問です。これが今回の座談会の 1 つの大事なポイントだと思うんですけども、植物形態学会と他の学会との違いや、植物形態学会ならではの特徴など、何かお考えがあったらお聞かせいただけますか。峰雪先生いかがでしょう。

峰雪：やっぱり 1 つは見る技術。もう 1 つは、絵の解釈というか画像の解釈。これもかなり知識がないと、その写真を間違っただけで解釈してしまうわけで。そういうところの色々なハウツーがここで学べるというのはすごく大きい。

永田：技術がちょっと他よりも難しいところもあるので、その技術交換の場として存在するってということですね。

峰雪：だから、医学部の解剖の先生なんかがよく言うのは、電顕観察なんていうのは生きているイカの構造を調べるのにスルメを観察しているようなものだ。

永田：はい、撮影像の話ですね。

峰雪：イカの構造を調べるのにスルメを見て意味があるのかってという問題。そういうアーティファクトを見て、どういうアーティファクトでこのように見えているのか考えて、元の姿を想像するのが始まりの学問であり、ただ見えたからこれが事実だっていうのはもう大きな間違いであるっていうのを知っておく必要がある。最近の顕微鏡では、素人でもボタン 1 つできれいな像を得られるようになってきたので、それを見て誤った解釈をやっている人が結構いるのは問題です。

例えば、僕も昔オーストラリアにいた時蛍光で DNA 定量をやっていたんですが、これものすごく難しいんです。レンズから核までの距離がちょっと違ったら、同じ G1 期の核でも 1.5 倍くらい明るさが違うことがあるので、定量にはいろいろ注意が必要な訳です。僕は日本で習っていなかったのですが、向こうでうるさい人がいて、ちゃんとリニアリティーがあるところで定量しなければ話にならないことをきちんと教え込まれました。日本に帰ってきたら日本の有名な雑誌に、あえて言わないですけど、編集長のところから出てる論文に、モニターでみえる輝度をリニアリティー考慮せずに測って、それで定量したって論文が掲載されている。

そういう間違いはやっぱり問題だと思うし、正しい知識を若い人に引き継いでもらえる、あるいは若い人が勉強できるのがすごくいい学会かなって思います。いつだったかな、私が

庶務幹事のときだったと思いますけど、JPR シンポジウムで、形態学会共催で花のシンポジウムをやった時に、招待していた外国の方から、植物形態で学会ができていいるは世界で日本だけじゃないかって言われました。

永田：そうですか。

松永：なるほど。

峰雪：確かにアメリカでは、元々 American Society of Plant Physiologists という植物生理学の学会だったのが Plant Biology って名前を付けた (American Society of Plant Biologists) もんだから、形態とか分類とか、American Journal of Botany の母体になっている学会の方は、なんかちょっとしんどくなっているところがあるみたいだし。そういう意味では日本で植物形態学会が存在していることはユニークなことですね。

永田：ありがとうございます。では次、アリ先生いかがでしょう。先ほど学生が参加するハードルが低いとかいう話は出ましたけど。

アリ：形態学会とほかの学会の違いや特徴ですね。形態学会が誇れるものは何かという話なんですけど、1 つは、先ほど申し上げたとおり、指導教員としては学生を連れて行きたくなるような学会ですね。それこそがすごく大事だと私は思いますね。参加登録はメール添付で要旨を送るとか、テンプレートもあって、それに合わせて原稿を書き加えて出すだけっていうシンプルさ。で、後からミスに気づいた場合でも、差し替えも許してくれる (一同笑い)。

永田：あと当日持ち込みも可みたいなことさえ書いてあるんですね。

アリ：そこまで気楽に参加できるっていうのは、非常に誇れるものでもあると思います。今の時代、発表申し込み期限は大体半年~3 カ月前とすごく早い、早すぎますね。われわれは手作り感満載の学会で、発表申し込みの締切は 8 月中旬で、学会は 9 月っていうのは、まさに奇跡だと思いますね。

私は形態学会運営の中心になった経験はないんですけど、今市先生が書かれてる文章を拝見すると、やはり中心になってやると、(大会当日は) 一息つけたのは夕方ぐらいとか。結構大変だろうとは思いますが、でもそれがあるから軌道修正もできて、いろんなことができるのだなと思います。

形態学会そのものの特徴があるとしたら、峰雪先生がおっしゃったように技術というところもたぶん 1 つ目のキーワードになると思うんですが、私は「技術」から「専門分野」っていうふうに置き換えて、どんな専門分野の研究であっても、必ず「形 (形態)」の解釈は重要だと思います。生き物である限り、みんな形態を持ってるので。だから「形態学会」は世界に一つしかないのであれば、それ自体がものすごいことですし、いいところ取りしてるっていうか、ミクロ・マクロな視点で何をやっても、形態学に必ずたどり着くというのは大事なことで、例えば細胞生物学、形態形成、分類学、遺伝学や発生進化においても必ず「形態」が絡んできます。ある意味で、すごい幅広い領域をカバーしてるところも、この学会の特徴でもあります。そんなところかなと思います。

2つ目は、これ、カットかもしれない（一同笑い）。私は日本に来て、もう 23 年目経ちますが、国内の学会よりも、国際会議のほうがリラックスができるというか、より開放感があると感じます。そこがちょっぴり残念に思うときがあります。

**松永**：確かにそうですね。

**アリ**：日本の学会と言う場では、まだ変な緊張感があると思うんですけどね。

それが、形態学会にはほぼほぼない。何しろ先ほども出ましたけど、ポスター発表の会場ではワインを片手に議論するのが国際学会流なんだと思われがちですが、国内では形態学会ぐらいじゃないでしょうか。植物学会や植物生理学会はミキサーで別会場だしね。

形態学会のみがメインイベントの一つであるポスターセッションで「もうビールが冷えるよ」と主催者側から聞こえてくるし、飲みながらディスカッションできるのが、世界水準に達してるなって思います（一同笑い）。

**松永**：プラス評価ですね。いいですね。確かに。

**アリ**：そういう意味でもすごく特徴のある学会で、初めて出会った時からみんな仲良くなるし、懇親会、2 次会っていう流れの中で話が盛り上がっていくので、みんなの団結力が育つ場でもあるなど改めて思います。

さらに付け加えると参加費も安い。年会費も安い。今も学生の年会費は 1,000 円ですか？

**永田**：学生は 1,000 円です。

**松永**：あり得ない（一同笑い）。

**アリ**：あれだけ会場の準備をして、パネルも用意して、自分の話を大勢の前で聞いてもらえる場を、消費税が上がってもたった 1,000 円でできるっていうのも、学生に優しい。お財布にも優しいですね。

**松永**：お財布に優しい（笑）。

**永田**：本当にそうですね。では、次は松永先生お話いただけますか。

**松永**：はい。1990 年ぐらいに入ってから、ようやく GFP（Green fluorescence protein：緑色蛍光タンパク質）を発端として、蛍光タンパク質が使われだすという時代で、その前はほとんど固定細胞でやっていた、形態学をやっていた時代だったんですね。

当時は、分子生物学や生化学が非常に旺盛な時代で、形態のデータっていうのが入らなくても一流のジャーナルに論文が載っていたけれど、今むしろ一流のジャーナルを見ると、イメージングのデータとか形態学のデータが載ってない論文を見つけるほうが大変なぐらい、全く時代が変わってしまった。だから、この時代が来るっていうことを見込んで、この学会を 1980 年代後半に設立したところに、黒岩常祥先生（日本女子大、当時東京大）の先見性の素晴らしさがあったと、僕は思ってます。実は植物形態学会というのは、サイエンスの先取りをしていった、そういった学会なんではないかなと思っています。

歴史を紐解くと、例えば細胞もコルクで見つかったり、それから僕がやってる染色体も実は植物細胞で見つかったりするんですね。バイオロジーを切り開くときには、必ず植物形態学があった。これからの植物形態学も、サイエンスのフロントランナー的な形の役割を果たしていく可能性は十分にありますので、この学会がそういった研究者を育て、もしくは輩出して行くような役割は、今後ますます重要になってくると、僕は思っています。

## 植物形態学を取り巻く現状と、植物形態学会の将来像

永田：GFP とかの話が出たので、私も少し話してもいいですか。

松永：はい。

永田：この学会は、形態分類とかに加えて、GFP 等の分子生物学的手法をベースにした研究発表がとて増えてきてますよね。それを良いと捉える面もあれば、ちょっと残念だと捉える面もあり、まあ両方あると思うんですけども、規模が小さい学会のわりには今風なものがどんどん入ってきてるのかなと思って拝見してます。意見が分かれるところかもしれませんが、学会の将来像という点では、私自身は悪いことではないと思っています。



アリ：そうですね。何となく、運営の姿形とか、この学会が発足した当時の目標も、何一つ変えないで中身が時代とともに少しずつ、新陳代謝じゃないけど、顕微鏡、電子顕微鏡の講演や発表をする研究者は減って行って、新しい時代のライブイメージングとかしたものが、自然と入れ替わっているこの形態学会の器のでかさってというか、何でもウエルカムなところも、ある意味別にそこは歓迎すべきところかなと。やはり現象、昔、静止画ですよ。電子顕微鏡は、固定して殺して、でもすごく解像度が高くて、ただ、すごく微細な構造が見えるかもしれないけど、ライブイメージングにかなわないのは、ダイナミズム。今の新しい技術でみるっていう意味では、やっぱり両方大事だと思うし、それは私もあまり問題にはならないと思う。

永田：はい、電顕屋としては電顕の規模が小さくなるのは残念ではあるんですが、皆さんに来ていただかなくては意味がないので。電顕も発表はしているので、ライブイメージングの方にも、電顕って今はこんな感じのできるのねということも知ってもらえますし、やっぱり最先端の蛍光技術とかもどんどん入ってくるのは、私はとてもいいことかなと思います。

アリ：そうですね。

永田：峰雪先生どうですか。

峰雪：設立の頃は充分状況が違っていたと思います。当時は分子生物学が台頭してきた時代

だったから、いわゆるクラシックな意味での形態、器官学のようなマクロレベルの形態学がもうほとんど廃れかけていました。

永田：もう設立の頃からそんな雰囲気か。

峰雪：いや、その前から。

永田：そうなんですね。

峰雪：例えばここ（東京大学理学部二号館）で形態学の授業する人がいなかった。僕の学生の頃は東大でちゃんとした形態を教えられるのは、駒場の原襄<sup>のぼる</sup>さんしかいなかったんですね。僕の時、学部の植物形態学の授業は千葉大の福田さん（福田泰二先生、当時千葉大）が集中講義の形で来られていました。

細胞のほうはこれから格好良くなりそうな雰囲気があった時代で、国内でもやっている人はそれなりの数いらっしゃいましたが、マクロなレベルの形態をやっている人が減少し、後継者がほとんどいなかったのので、黒岩さんたちこの学会を立ち上げた先生方には危機感があったと思うんです。だから、もうとにかく格好いい話できなくても、形が関係すればもう誰でもいいからおいでよってという感じで始まったんだと思います。それは面白かったと思いますけどね。

松永：すごいビジョンですね。

永田：この中では、アリ先生はマクロに近い側ですね。この辺りはどういうふうに捉えていらっしゃいますか。

アリ：そうですね、私自身は電顕を扱う技術はないんですけど、うちの学生の中には繊毛をよく見る学生がいたりするけれど、やはり電顕が、私が必要としてない。普段から必要としてないけど、ずっと残してほしいと思いますし、いざというときに電顕と言えあの方に相談すべきでしょうという安心感がなくて、何人かずっといるとやりやすい面もあります。

松永：そうですね。

永田：今市先生が寄稿文で「様々な植物群を扱う研究者や形態多様性に興味をもつ会員の大会参加が少なくなってきた」、つまりマクロとしての植物の形態という観点の人が減ったとおっしゃっているんですが、その辺はどう思われていますか？

アリ：減ったかもしれない。分子系統でどれぐらい変わっていくかはまた別としても、そういう意味では何て言うんでしょうか、分類ではなくて形態……。



永田：植物形態。

アリ：うん、世の中はどっちに向かっているかっていうと、たぶん Evo-Devo（エボデボ）っていう発生進化と、さらに言うと「Evo-Devo-Eco」の時代がやってくると思います。生態学が入らないと、いつまでも管理された栽培室の中でやっても、自然環境下における植物の生き様を完全に理解することが難しいでしょう。

松永：実験室レベルですからね。

アリ：やっぱり野外でどうなのかっていう意味では、また違ってくるでしょうから、その間にまた形態の新たな変化が見えてくるでしょうし、形態学のマイクロやマクロな視点を必要としない時代は、私は来ないと思います。

永田：なるほど。

アリ：必ず必要だと思います。

松永：必要だと思いますね。そのとおりだと思います。

## 植物形態学を取り巻く現状と、植物形態学会の将来像

永田：では、今後の学会の展望や方向性についてはどうでしょう？

松永：今アリさんがおっしゃったように、今後、フィールドの研究も重要になってくるでしょう。形態学はどういう学問がこれから発展していても、必ず必須になる学問分野だと思います。植物形態学会が果たす役割は、今後 10 年、20 年先であっても、変わらず必須な学問であり続けるので、本学会から必要な人材、必要な技術っていうのは出てくると思っています。

電子顕微鏡のような高精細な、微細な構造を見る技術軸をこれからも大切にして、新しい技術を柔軟に取り入れるという方向性です。植物は柔軟性も可塑性もありますので、可塑性と柔軟性を重んじる、そういった植物形態学会であれば、今後も十分発展していけます。

永田：時代、時代に合わせて自然に変わっているところがありますよね。

松永：はい、そう思います。

永田：会長はいかがでしょう？

峰雪：学問の分野っていうのは時代で変わるし、観察する装置や技術の進歩で見えなかったものが見えてくるわけだけど、そのときに、見えた像がどうしてそういう形に見えるのかという理由がきちんと分かることが大事だと思う。

永田：なるほど。別に電顕に限らずっていうことですよね。

松永：確かに。そのとおりですね。

峰雪：だからこそ形態学会へ来たら、誤った解釈をしていたら、「そうじゃないよ」っていう

のを教えてもらえるっていうのが基本かなと思います。

永田：先ほどから「像の解釈」が大事っておっしゃってますよね。

峰雪：ただ、こんなこと言ったら昔の偉い先生に怒られるかもしれないけれど、日本の電頭っていうのは割に皆さん、きれい（美しい）・汚い（美しくない）っていうんですね。写真が美しくないから駄目だとか。写真がアーティスティックにきれい・汚いではなくて、言いたいものがはっきり見れば芸術的に今一つでも、一見美しくても何も言えない写真よりはずっと意味があるということをあまり教育していない。日本では、どっちかっていうとやっぱり美術的なことを強調する教育をしてきたと思います。

永田：日本は見た目、ごみもなくきれいな像を望むっていうことですか？

峰雪：そうだと思います。

永田：そういえば、今後の展望に関して、何回かワーキングを立ち上げるのに、峰雪先生は関わっていますよね。

峰雪：これから大会参加者がどしどし増えたときにどういうふうになるかっていうのは、僕は危機感があって立ち上げた。

永田：そうですね。設立当初から比べると、会員数は特に増えてないんですが、実はポスター数がものすごく増えたんですね。倍増してるっていうか、一気に。

松永：そうですね。

永田：30 ぐらいだったのが、急に 60 ぐらいの勢いになって。

松永：60 ですね、そうですね。

峰雪：ポスターをやるのはいいんだけど、お金がかかるんですよ。だからポスターが倍に増えたら参加費を増やさざるを得ないというのが、一番大きな問題としてあって。

永田：でもワーキングでもいろいろ話されましたが、結果的には今のスタイルは悪くないということになりましたね。

アリ：私が当時言ったこと、今でも覚えてますけど、ある大会で 60 名程度のポスター発表になったとしても、その後やっぱり上がったり下がったりするので、安定しないですね。

松永：ありますね。

アリ：ずっと 60 で推移してるわけではないので。

松永：そうですね。

アリ：だからといって、例えば植物学会から切り離して別でやるとか、丸 1 日かけてやるとか、そういうのはある意味ぜいたくな話で、参加者が増えたのは歓迎すべきところですよ。私が思うにはたぶん植物形態学会に直接関わってる先生方の意識の高さの裏返しですよ。学生をより多く、この形態学会に参加してもらいたいっていう。だから恐らく、研究室単位で

いうとそんなに数が増えてなくて、研究室当たりの参加学生数が増えたような気はします。

永田：そうですね。

アリ：なので、現時点ではそれほど人数の増加傾向を気にすべき段階ではないと思います。

永田：繁栄して孫弟子が増えてるってということですかね（一同笑い）。

峰雪：だから逆に言うとそういうある程度大きいグループが増えてはいるんだけど、それでも全然違う人が入ってきて、どしどし入りやすい環境が残っているっていうのが大事なんだと思いますね。

## 植物形態学を志す学生・研究者へのメッセージ

永田：では最後に、特に現会員や学生に伝えたいことなど、ございますか。会長、いかがですか。

峰雪：昔に比べ分子生物学をやっている人の中にも形態観察が大事だというふうに思い始めた人はかなり増えたと思います。それはいいことなのだけれども、やっぱり一番恐ろしいのは、最近はまだボタン押したら何でもできる時代になってきて、数字で出てきたらそれをそのまま信じちゃう人がいる。やっぱりそこがこれからの問題だなと思いますね。

あとはまあ、学生さんが形態の分野に興味を持って、ドクター取得してもなかなかポジションがない。

永田：ポジションがない・・・。

峰雪：これは本当に一番シリアスな問題。植物関係で言えば、昔の先生方の時代は電顕を研究室で維持できていたけども、今は難しい。地方国立大学の先生一人当たりの研究費は、それは少ないですよ。電顕が壊れたら修理代の方がそれ以上しますよね。そうすると、もう維持できなくなる。

アリ：そうですね。

峰雪：だから自分の研究室で電顕を持っている研究者はものすごく減ってきたんじゃないですかね。電顕観察を研究室の主テーマとして研究室を運営していくのは、なかなか難しいところがある。今は良い電顕になれば数億円になる。そうするとやっぱりこれから使い方も変わってくると思う。うらやましいのは、動物関係は医学部の解剖学教室があり、そこには給料をもらって電顕を維持する技官がいる。植物にはそういう人がいない。おそらく、研究科や大学でお金取ってきて電顕買うことはできても、その後の維持が大変。維持には全く予算が出ない。技官を雇う費用もない。

アリ：そうですね。

松永：なるほど、確かに。

峰雪：だから、電顕を看板とした植物の研究室はどしどしつぶれていく。本当はそういう研

研究室で育った電頭を使える人、維持管理できる人がドクター取ってあちこち行けばいいんだけど。日本は、技官っていう立場の扱いがものすごく良くない。オーストラリアだと、技術レベルによって技官はランク分けされていて、上は教授よりもいい給料貰っているような技官がいるわけですね。戦後間もない頃にここの化学教室にいたガラス細工の技官の人は、アメリカに引っこ抜かれて向こうにいて活躍をした。

アリ：そうなんですね。



峰雪：ここの動物学教室にいた成茂さんは、結局独立して会社つくって世界のナリシゲになっちゃったわけでしょう。当時は給料が低い問題はあったが、終身雇用の技官のポジションはある程度あった。しかし、最近は技官のポジションも減ってきているし、期限付きのポジションが多い。高度な技術があっても、みんな年取ったら行くところがなくなり、大変困っている。それなりに評価してちゃんとしたポジションを与える、つまり、『俺はこういう高等技術を持った技官だ』っていうのが日本でも十分通用するような社会つくるのが大事だとは思いますが。

永田：ありがとうございます。では、最後にそれぞれメッセージを。

アリ：そうですね、この学会が始まって30年。これから次の10年、20年のためには、まさに今の学生達を中心になって引っ張っていこうから、私個人として、この学会のいいところを守り抜くように、学生には伝えたいと思います。彼らが参加することによって、形態学会の素晴らしいところとは何か実感して、そこを気に入ってもらって、このほかの学会にないところをちゃんと認識した上で守るっていうのが、大事なことだと思います。

もう1つは、多くの人新しい物好きで、やはりものに魅力を感じる時代なので、みんなそっちに流れていくような傾向があります。特に最近、研究の分野にしてもこだわり抜くっていう職人技っていうかね、生涯30~40年、1つの現象にずっと没頭してやるっていうのが減ってきてるような気がして。結局何かをとことん追求する余裕がなくなりつつあるんです。

ね。早く論文出さなきゃ、多くの業績がなければ次がない。その結果、簡単にあるいは短時間で出そうなところについつい流されてしまうような感じがするんですよね。こう言う時代だからこそ、私はこの形態学会の理念を時代には合わせないで欲しいと願っています。

ただ一方で、これまでも、そしてこれからも、時代の変化を受け入れられる器のでっかい学会として、時代の変化と技術の進歩、形態を観察するための様々な技術を受け入れることは大歓迎です。言い換えれば、時代の流れには背を向けることなく、日本植物形態学会が1988年1月に会員155名で発足した当時の理念と目標を時代の荒波にさらわれることのないようにしたいと思います。

永田：はい、ありがとうございます。では、最後に松永先生よろしくお願ひします。

松永：はい、そうですね。私ももうアリさんが素晴らしいことをおっしゃってくれた、そのとおりに賛成ですね。日本植物形態学会もやはり理念は、植物の形態学を研究して、それによって何か現象を発見する。そしてその発見した現象を解析していくことなので、それを大切にしたいとこの学会は今後も発展していけばいいと思います。

この日本植物形態学会の会員の中から、新しい現象を発見した、もしくは新しい技術を発見したということで、世界に発信できるような、そういった成果が出てきて、そういった研究者が育ってほしいと思っています。

永田：松永先生、きれいに締めていただいてありがとうございます。また、皆様も本日はどうもありがとうございました。

一同：ありがとうございました。

資料—1. これまでのあゆみ

年	事項	情報
1985年	本学会設立のための趣意書案検討開始(10月2日)	世話人7名で開始
1986年	設立準備委員会発足(10月8日) <役員決定による任務完了により1988年4月5日解散>	設立準備委員(15名) 原囊,植田勝巳,小野莞爾,加藤雅啓, 黒岩常祥,佐藤利幸,三戸信人,田中健治, 田中隆荘,長田敏行,新津恒良,福田泰二, 堀輝三,増田恭次郎,村上悟
1987年	本学会会則決定(11月26日)	日本植物学会第52回大会(筑波大学)の関連集会にて決定
1988年	日本植物形態学会発足(1月1日)	会員数:155名
	会長および評議員選挙・開票(3月19日)	於:基礎生物学研究所 立会い:田中健治 投票数:107票
	役員内定(3月26日)	原会長,黒岩,新津両評議員,田中健治氏による会合で決定
1991年	植物形態コロキウム開始(3月)	植物形態学会有志による活動 詳細案内:今市涼子
	植物形態ワークショップ開始(5月11日)	詳細案内:田中健治
1996年	植物形態学会3賞開始(10月)	
2005年	懇親会開始(9月20日)	第17回植物形態学会後の懇親会が第1回
	「形態学会将来計画WG」発足	
2006年	「形態学会将来計画WG」最終報告書作成(9月13日)	
2007年	日本学術会議協力学術研究団体に指定(11月22日)	
2008年	会費および大会参加費改定(9月24日)	学生会員年会費:2,000→1,000円へ 非会員の大会参加費を設定 一般3,000円,学生2,000円 (会員は各1,000円)
2009年	特許庁指定学術団体に指定(2月)	
2010年	Journal@rchiveよりPlant Morphology 1 ~20巻 一般公開開始(7月)	
	J-STAGEに採択(9月)	
2012年	学会誌掲載論文の機関リポジトリ許諾に関する学会のポリシー決定	

年	事項	情報
2014年	Atlas of Plant Cell Structure出版(25周年記念事業として)	
	生物科学学会連合へ加入	
2016年	学会ホームページリニューアル	
2017年	「日本植物形態学会大会検討WG」発足	委員長:山形大 宮沢豊会員 2018年(平成30)年に最終報告書
2018年	「日本植物形態学会大会検討WG」最終報告書作成	
2019年	ポスター賞を学生限定に	
	「日本植物形態学会30年のあゆみ」をHPに掲載(30周年記念事業として)	

資料-2 大会一覧

開催数	開催日	開催場所	大会長 (～2006世話人)	大会実行委員	大会準備 委員長	大会 参加者数	講演数 上:ポスター数 下:平瀬賞	懇親会
第1回	1988年 10月12日(水)	岡山大学 教養部 (岡山県岡山市)	武丸常雄 (岡山大学)	鎌田克 神田東作	原襄	106	4 30	ポスター会場に 茶菓の用意あり 討論兼懇親 以下同じ
第2回	1989年 9月26日(火)	東北大学 教養部 (宮城県仙台市)	駒嶺穆 (東北大学)	前田靖男 遠田宏		87	4 23	
第3回	1990年 10月1日(月)	静岡大学 教養部 (静岡県静岡市)	伊藤道夫 (静岡大学)				4 36	
第4回	1991年 9月12日(木)	東京医科大学 (東京都新宿区)	新津恒良 (慈恵会医科大学) 長船哲斉 (東京医科大学)				6 36	
第5回	1992年 9月16日(水)	帝塚山短期大学 (奈良県奈良市)	植田勝己 (奈良女子大)				4 33	
第15回 国際植物科 学会議 (IBC)	1993年 8月28日(土)～ 9月3日(金)	横浜国際平和会議場 (神奈川県横浜市)						
第6回	1994年 9月19(月), 20日(火)	北海道大学 教養部 (北海道札幌市)				70以上	2 33	
第7回	1995年 9月25日(月)	金沢大学 教養部 (石川県金沢市)				67	3 24	

開催数	開催日	開催場所	大会長 (～2006世話人)	大会実行委員	大会準備 委員長	大会 参加者数	講演数 上:ポスター数 下:平瀬賞	懇親会
第8回	1996年 10月9日(水)	九州大学 六本松地区 (福岡県福岡市)				74	5 34	
第9回	1997年 9月17日(水)	東京大学 本郷キャンパス (東京都文京区) *植物学会と別会場				80	4 35	
第10回	1998年 9月20日(日)	広島大学 総合科学部 (広島県東広島市)	峰雪芳宣 (広島大学)			70以上	5 32	
第11回	1999年 10月4日(月)	秋田大学 手形キャンパス (秋田県秋田市)				60以上	5 34	
第12回	2000年 9月28日(木)	静岡大学 静岡キャンパス (静岡県静岡市)				80以上	5 36	
第13回	2001年 9月25日(火)	東京大学 本郷キャンパス (東京都文京区) *植物学会と別会場				80以上	6 36	
第14回	2002年 9月20日(金)	京都大学 北部キャンパス (京都市京都市)				60以上	4 32	
第15回	2003年 9月25日(木)	北海道大学理学部 (北海道札幌市)				60以上	5 33	

開催数	開催日	開催場所	大会長 (～2006世話人)	大会実行委員	大会準備 委員長	大会 参加者数	講演数 上:ポスター 下:平瀬賞	懇親会
第16回	2004年 9月9日(木)	日本大学生物資源科学部 湘南キャンパス (神奈川県藤沢市)	内山寛 (日本大学)			80 一般46 学生34	2 32	
第17回	2005年 9月20日(火)	富山大学 人文・社会系共通教育棟 (富山県富山市)	増田恭次郎 唐原一郎 (富山大学)			80以上	5 26	第1回 於:ととや 39名参加 (世話人:杉山立志)
第18回	2006年 9月13日(水)	熊本大学 黒髪キャンパス北地区 (熊本県熊本市)	高野博嘉 (熊本大学)			90	2 33	第2回 於:さかな市場 55名参加 (世話人:高野博嘉)
第19回	2007年 9月6日(木)	東京理科大学 野田キャンパス (千葉県野田市)	河野重行 (東京大学)			90以上	2 32	第3回 於:吉春東口店(柏市) 約20名参加
第20回	2008年 9月24日(水)	高知大学 朝倉キャンパス (高知県高知市)	峯一朗 (高知大学)			98	3 34	第4回 於:よさこい 43名参加
第21回	2009年 9月17日(木)	山形大学 小白川キャンパス (山形県山形市)	横山潤 (山形大学)			94	2 44+(2)	第5回 於:味山会 45名参加
第22回	2010年 9月8日(水)	中部大学 (愛知県春日井市)	東山哲也 (名古屋大学)	上野宜久		87 一般58 学生29	3 39+(1)	第6回 於:食事処わしよく屋 49名参加
第23回	2011年 9月16日(金)	日本女子大学 目白キャンパス (東京都文京区) <small>※植物学会上部会里</small>	箸本春樹 (東京大学)			118 一般76 学生42	4 54+(2)	第7回 於:いり江 41名参加

開催数	開催日	開催場所	大会長 (～2006世話人)	大会実行委員	大会準備 委員長	大会 参加者数	講演数 上:ホスター数 下:平瀬賞	懇親会
第24回	2012年 9月14日(金)	兵庫県立大学 姫路書写キャンパス (兵庫県姫路市)	峰雪芳宣 (兵庫県立大学)			96 一般58 学生38	2 42+(2)	第8回 於:ゆずの小町 51名参加
第25回	2013年 9月12日(木)	北海道大学 札幌キャンパス (北海道札幌市)	本村泰三 (北海道大学)			89	2 58+(3)	第9回 於:北海道食市場 丸屋パセオ店 48名参加
第26回	2014年 9月11日(木)	明治大学 生田キャンパス (神奈川県川崎市)	箸本春樹 (神奈川県大学)			106	2 67+(1)	第10回 於:庄や生田店 52名参加
第27回	2015年 9月5日(土)	朱鷺メッセ (新潟県新潟市)	林八寿子 (新潟大学)			91	3 48	第11回 於:旬海住肴一家 49名参加
第28回	2016年 9月15日(木)	琉球大学 西原キャンパス (沖縄県中頭郡)	八木沢英美 (琉球大学)		酒井敦	99 予約77 当日22	5 50	第12回 於:琉球大学生協北食 堂 37名参加
第29回	2017年 9月7日(木)	東京理科大学 野田キャンパス (千葉県野田市)	松永幸大 (東京理科大学)		酒井敦	110 予約77 当日33	3 45	第13回 於:東京理科大学 教職員食堂 42名参加
第30回	2018年 9月13日(木)	広島県情報プラザ (広島県広島市) *植物学会と別会場	藤江誠 (広島大学)		酒井敦	102 予約73 当日29	3 50	第14回 於:広島大学生協東千 田店ブナナダイニング 39名参加
第31回	2019年 9月14日(土)	東北大学 川内キャンパス (宮城県仙台市)	宮沢豊 (山形大学)	小林和貴	酒井敦			

年	会長	庶務幹事	会計幹事	会計監査	評議員	編集委員長	編集委員	広報委員長	広報委員	事務局
1988年	原襄	新津恒良	長嶋哲斎	西田誠	伊藤道夫, 植田勝巳, 黒岩常祥, 駒嶺穆, 相馬研吾, 竹内郁夫, 新津恒良, 福田泰二, 堀輝三, 村上悟	田中健治	鈴木三男 野口哲子			東京慈恵会医科大学 生物学教室
1989年	原襄	新津恒良	長嶋哲斎	西田誠	伊藤道夫, 植田勝巳, 黒岩常祥, 駒嶺穆, 相馬研吾, 竹内郁夫, 新津恒良, 福田泰二, 堀輝三, 村上悟	田中健治	鈴木三男 野口哲子			慈恵医科大学 生物学教室
1990年	原襄	黒岩常祥	長嶋哲斎	村上悟	伊藤道夫, 岩槻邦男, 大隅正子, 長嶋哲斎, 黒岩常祥, 三戸信人, 相馬研吾, 田中健治, 新津恒良, 堀輝三	田中健治	鈴木三男 堀輝三			東京大学 理学部植物学教室
1991年	原襄	黒岩常祥	長嶋哲斎	村上悟	伊藤道夫, 岩槻邦男, 大隅正子, 長嶋哲斎, 黒岩常祥, 三戸信人, 相馬研吾, 田中健治, 新津恒良, 堀輝三	田中健治	鈴木三男 堀輝三			東京大学 理学部植物学教室
1992年	新津恒良	石川依久子	相馬早苗	吉田治	植田勝巳, 大隅正子, 長嶋哲斎, 三戸信人, 田中健治, 西田誠, 原襄, 福田泰二, 宝月岱造, 村上悟	鈴木三男	田中健治 堀輝三			東京慈恵会医科大学 生物学教室
1993年	新津恒良	石川依久子	相馬早苗	吉田治	植田勝巳, 大隅正子, 長嶋哲斎, 三戸信人, 田中健治, 西田誠, 原襄, 福田泰二, 宝月岱造, 村上悟	鈴木三男	田中健治 堀輝三			東京慈恵会医科大学 生物学教室
1994年	黒岩常祥	河野重行	今市涼子	石川依久子	今市涼子, 植田勝巳, 鈴木三男, 戸部博, 新津恒良, 原襄, 福田泰二, 宝月岱造, 堀輝三, 峰雪芳宣	宝月岱造	箸本春樹 西野栄正			東京大学 理学系研究科生物学教室
1995年	黒岩常祥	河野重行	今市涼子	石川依久子	今市涼子, 植田勝巳, 鈴木三男, 戸部博, 原襄, 福田泰二, 宝月岱造, 堀輝三, 峰雪芳宣	宝月岱造	箸本春樹 西野栄正			東京大学 理学系研究科生物学教室
1996年	黒岩常祥	河野重行	今市涼子	石川依久子	今市涼子, 長嶋哲斎, 加藤雅啓, 河野重行, 黒岩晴子, 鈴木孝仁, 田中健治, 戸部博, 堀輝三, 峰雪芳宣	加藤雅啓	西野栄正 塚谷裕一			東京大学 理学系研究科生物学専攻

年	会長	庶務幹事	会計幹事	会計監査	評議員	編集委員長	編集委員	広報委員長	広報委員	事務局
1997年	黒岩常祥	河野重行	今市涼子	石川依久子	今市涼子,長舩哲斎,加藤雅啓,河野重行,黒岩晴子,鈴木孝仁,田中健治,戸部博,堀輝三,峰雪芳宣	加藤雅啓	西野栄正 塚谷裕一			東京大学 理学系研究科生物学専攻
1998年	植田勝巳	鈴木孝仁	幡野恭子	戸部博	大隅正子,長舩哲斎,河野重行,黒岩常祥,黒岩晴子,鈴木三男,菅本春樹,宝月岱造,堀輝三	野口哲子	坂口修一 岩口伸一			奈良女子大学 理学部生物科学科
1999年	植田勝巳	鈴木孝仁	幡野恭子	戸部博	大隅正子,長舩哲斎,河野重行,黒岩常祥,黒岩晴子,鈴木三男,菅本春樹,宝月岱造,堀輝三	野口哲子	坂口修一 岩口伸一			奈良女子大学 理学部生物科学科
2000年	大隅正子	河野重行	今市涼子	黒岩晴子	今市涼子,河野重行,黒岩常祥,坂口修一,田中一朗,塚谷裕一,野口哲子,菅本春樹,宝月岱造,峰雪芳宣	野口哲子	酒井敦 坂口修一			東京大学大学院 新領域創成科学研究科 先端生命科学専攻
2001年	大隅正子	河野重行	今市涼子	黒岩晴子	今市涼子,河野重行,黒岩常祥,坂口修一,田中一朗,塚谷裕一,野口哲子,菅本春樹,宝月岱造,峰雪芳宣	野口哲子	酒井敦 坂口修一			東京大学大学院 新領域創成科学研究科 先端生命科学専攻
2002年	河野重行	田中一朗	今市涼子	黒岩晴子	今市涼子,大隅正子,長舩哲斎,黒岩晴子,鈴木孝仁,田中一朗,塚谷裕一,野口哲子,堀輝三,峰雪芳宣	野口哲子	酒井敦 坂口修一			横浜市立大学大学院 総合理学研究科
2003年	河野重行	田中一朗	今市涼子	菅本春樹	今市涼子,大隅正子,長舩哲斎,黒岩晴子,鈴木孝仁,田中一朗,塚谷裕一,野口哲子,堀輝三,峰雪芳宣	野口哲子	酒井敦 坂口修一			横浜市立大学大学院 総合理学研究科
2004年	河野重行	田中一朗	永田典子	菅本春樹	大隅正子,長舩哲斎,加藤雅啓,黒岩常祥,黒岩晴子,鈴木孝仁,西田治文,野崎久義,東山哲也,宮川勇	鮫島正純	福澤雅志 宮沢豊			横浜市立大学大学院 総合理学研究科
2005年	河野重行	田中一朗	永田典子	菅本春樹	大隅正子,長舩哲斎,加藤雅啓,黒岩常祥,黒岩晴子,鈴木孝仁,西田治文,野崎久義,東山哲也,宮川勇	鮫島正純	福澤雅志 宮沢豊			横浜市立大学大学院 総合理学研究科

年	会長	庶務幹事	会計幹事	会計監査	評議員	編集委員長	編集委員	広報委員長	広報委員	事務局
2006年	田中一朗	峰雪芳宣	永田典子	河野重行	今市涼子,加藤雅啓,黒岩常 伴,鮫島正純,塚谷裕一,西田 治文,野口哲子,箸本春樹,東 山哲也,峰雪芳宣	鮫島正純	福澤雅志 宮沢豊			兵庫県立大学大学院 生命理学研究科生命科学 専攻
2007年	田中一朗	峰雪芳宣	永田典子	河野重行	今市涼子,加藤雅啓,黒岩常 伴,鮫島正純,塚谷裕一,西田 治文,野口哲子,箸本春樹,東 山哲也,峰雪芳宣	鮫島正純	福澤雅志 宮沢豊			兵庫県立大学大学院 生命理学研究科生命科学 専攻
2008年	今市涼子	坂口修一	宮城島進也	黒岩晴子	河野重行,酒井敦,鮫島正純, 田中一朗,塚谷裕一,永田典 子,野口哲子,野崎久義,箸本 春樹,峰雪芳宣	箸本春樹	宮沢豊 山本真紀			奈良女子大学 理学部生物科学科
2009年	今市涼子	坂口修一	宮城島進也	黒岩晴子	河野重行,酒井敦,鮫島正純, 田中一朗,塚谷裕一,永田典 子,野口哲子,野崎久義,箸本 春樹,峰雪芳宣	箸本春樹	宮沢豊 山本真紀			奈良女子大学 理学部生物科学科
2010年	今市涼子	坂口修一	宮城島進也	黒岩晴子	河野重行,黒岩常伴,酒井敦, 坂口修一,田中一朗,永田典 子,野崎久義,東山哲也,松永 幸大,宮城島進也	箸本春樹	唐原一郎 山本真紀	宮沢豊	唐原一郎 坂口修一	奈良女子大学 理学部生物科学科
2011年	今市涼子	坂口修一	宮城島進也	黒岩晴子	河野重行,黒岩常伴,酒井敦, 坂口修一,田中一朗,永田典 子,野崎久義,東山哲也,松永 幸大,宮城島進也	箸本春樹	唐原一郎 山本真紀	唐原一郎	岩元明敏 坂口修一	奈良女子大学 理学部生物科学科
2012年	野口哲子	酒井敦	林八寿子	河野重行	今市涼子,黒岩常伴,坂口修 一,鮫島正純,塚谷裕一,箸本 春樹,東山哲也,松永幸大,峰 雪芳宣,宮城島進也	唐原一郎	山本真紀 Ferjani Ali	岩元明敏	Ferjani Ali 酒井敦	奈良女子大学 理学部生物科学科
2013年	野口哲子	酒井敦	林八寿子	河野重行	今市涼子,黒岩常伴,坂口修 一,鮫島正純,塚谷裕一,箸本 春樹,東山哲也,松永幸大,峰 雪芳宣,宮城島進也	唐原一郎	山本真紀 Ferjani Ali	岩元明敏	Ferjani Ali 酒井敦	奈良女子大学 理学部生物科学科
2014年	野口哲子	酒井敦	林八寿子	松永幸大	今市涼子,河野重行,酒井敦, 鮫島正純,田中一朗,塚谷裕 一,永田典子,Ferjani Ali,野 崎久義,峰雪芳宣	唐原一郎	稲田のりこ 宮沢豊	高野博嘉	宮沢豊 酒井敦	奈良女子大学 理学部生物科学科

年	会長	庶務幹事	会計幹事	会計監査	評議員	編集委員長	編集委員	広報委員長	広報委員	事務局
2015年	野口哲子	酒井敦	林八寿子	松永幸大	今市涼子,河野重行,酒井敦,鯨島正純,田中一郎,塚谷裕一,永田典子,Ferjani Ali,野崎久義,峰雪芳宣	唐原一郎	稲田のりこ 宮沢豊	高野博嘉	宮沢豊 酒井敦	奈良女子大学 理学部生物科学科
2016年	河野重行	峰雪芳宣	林八寿子	松永幸大	Ferjani Ali,稲田のりこ,唐原一郎,酒井敦,永田典子,野口哲子,野崎久義,東山哲也,松永幸大,宮城島進也	唐原一郎	稲田のりこ 宮沢豊	高野博嘉	宮沢豊	兵庫県立大学大学院 生命理学研究科
2017年	河野重行	峰雪芳宣	林八寿子	松永幸大	Ferjani Ali,稲田のりこ,唐原一郎,酒井敦,永田典子,野口哲子,野崎久義,東山哲也,松永幸大,宮城島進也	唐原一郎	稲田のりこ 宮沢豊	高野博嘉	宮沢豊	兵庫県立大学大学院 生命理学研究科
2018年	峰雪芳宣	永田典子	林八寿子	野口哲子	今市涼子,唐原一郎,河野重行,嶋村正樹,塚谷裕一,林八寿子,東山哲也,松永幸大,宮城島進也,宮沢豊	堀口吾朗	榊原恵子 宮沢豊	佐々木成江	宮沢豊	日本女子大学 理学部物質生物科学科
2019年	峰雪芳宣	永田典子	三角修巳	野口哲子	今市涼子,唐原一郎,河野重行,嶋村正樹,塚谷裕一,林八寿子,東山哲也,松永幸大,宮城島進也,宮沢豊	堀口吾朗	榊原恵子 吉田大和	佐々木成江	吉田大和	日本女子大学 理学部物質生物科学科

資料－4 会員数の変遷

年	会員数(名)
1988年	209
1989年	223
：	：
2008年	229
2009年	246
2010年	247
2011年	260
2012年	264
2013年	284
2014年	286
2015年	302
2016年	296
2017年	245
2018年	248

資料 5. 図1 学会設立準備委員会メンバー (1987年)

日本植物形態学会準備委員	1987.1.10
原 豪	東大・教養・生物
植田勝乙	熊本大・理・生物
小野莞爾	熊本大・理・生物
加藤雅啓	東理・植物園日光分園
黒岩常祥	基研・細胞機構
佐藤利幸	北大・低温科学研
三戸信人	山口大・理・生物
田中健右	名大・医・付属植研
田中隆荘	広島大・理・植
長田敏行	基研・細胞機構
新津恒良	徳恵医大・生物

基礎生物学研究所

福田泰二	千葉大・教養・生物
坂輝三	筑波大・生物科学系
増大恭次郎	高小大・理・生物
村上悟	東大・教養・生物

基礎生物学研究所

-----「日本植物形態学会」設立に向けて-----

今日、植物の形態に関する研究は、蛍光顕微鏡を初めとした光学顕微鏡の発達、急速凍結固定法等、新しい電子顕微鏡技術の開発、TVによる映像撮影と画像解析法の発達、細胞培養技術の高度化などによって大きく影響を受け、著しい変貌を遂げようとしております。これらの技術の発達は、従来の観察技術では得ることのできなかった高次形態に関する情報を、動的、かつ定量的に得ることを可能にしました。また遺伝子工学、細胞工学といった技術及び方法論の発達の結果、植物個体や器官発生の構造形成過程を遺伝子の導入によって調べることができまます。植物の分子生物学や生理学が著しく発展すれば、植物の「形態」に関する情報はこれまでに以上以上に必須なものとして要求されるようになりましよう。従いまして、これまでとかく静物的と考えられて来た植物形態学も、新しい内容を付け加え飛躍的發展が期待されているのが、世界的状況と思われまます。

一方、わが国における植物の形態、構造そしてその機能に関連した分野の研究者は、全国の諸機関でさまざまな研究を行なっています。その対象は器官、組織はもとより、細胞、細胞小器官から分子にわたり、分類学、系統学、細胞学、生理学、生態学、発生学、遺伝学などあらゆる分野に関連を持っています。技術的にも光学顕微鏡法、電子顕微鏡法、さらには生化学的方法を用い、形態形成、発生、分裂、運動、刺激受容等、植物特有の現象から生物に普遍的な現象に至るまで、基礎的な研究を推進しています。

しかしながら、これらの植物形態学に関連した研究者は、新しい技術や思考の流れを積極的に論議し、実質的な相互の交流を行なう適当な場を持っていません。総合学会的な性格を持つ日本植物学会がその唯一の場と思われまますが、その中だけではこれからの植物形態学の発展に対処し、これを推進するための実効ある交流を図ることは不十分な状況にあります。

私ども発起人一同は、このような状況にある植物形態学の研究者相互の交流を図り、実

質的な植物形態学推進のための核となるような場をつくって、その一層の発展を期し、併せて研究者間の親睦を深める必要性を痛感して参りました。従来、日本植物学会の関連集會として、植物形態学会、植物細胞生物研究会、微細構造談話会があり、それぞれ固有の活動をして参りましたが、昭和60年の植物形態学会の集會を足掛りとして、私ども発起人が集參、協議し、これらを総合的に一つにまとめ、「日本植物形態学会」を設立しようという結論となりました。

「日本植物形態学会」設立の趣旨を充分にお汲み取り頂き、新しい植物形態学の発展に向けて、学会へのご参加、ご協力を頂きたく、宜しくお願い申し上げます。

発起人一同

- |      |       |       |       |      |       |      |
|------|-------|-------|-------|------|-------|------|
| 秋山 優 | 石川依久子 | 伊藤道夫  | 井上 勲  | 井上 寛 | 今市涼子  | 上木勝司 |
| 植田勝巳 | 植田邦彦  | 植田利喜造 | 内海俊策  | 江原友子 | 大隅正子  | 太田敬久 |
| 岡村はた | 長船哲斉  | 小野亮爾  | 笠原基知治 | 加藤雅啓 | 金子堯子  | 上條明雄 |
| 河野重行 | 北川尚史  | 黒岩常祥  | 小林幹夫  | 犀川政稔 | 堺 弘介  | 坂口修一 |
| 佐藤七郎 | 佐藤利幸  | 三戸信人  | 島袋敬一  | 菅井道三 | 杉原美徳  | 鈴木孝仁 |
| 鈴木三男 | 関 太郎  | 世羅敬哉  | 相馬研吾  | 相馬早苗 | 高相徳志郎 | 高尾昭夫 |
| 高尾静代 | 高橋正道  | 竹久 慎  | 武丸桓雄  | 田中一朗 | 田中健治  | 田中陸莊 |
| 角田修次 | 中沢信午  | 長島秀行  | 長田敏行  | 中田政司 | 中村宗一  | 新津恒良 |
| 新居直祐 | 西尾康三  | 西野栄正  | 根平邦人  | 根本泰行 | 野口哲子  | 著本春樹 |
| 原 稟  | 馬場三吾  | 日詰雅博  | 平野 正  | 広川秀夫 | 福田泰二  | 藤田哲夫 |
| 宝月岱造 | 星野卓二  | 堀 輝三  | 増田恭次郎 | 松島 久 | 三木 子  | 三田高志 |
| 宮川 勇 | 宮田町子  | 宮村新一  | 村上 悟  | 矢沢静江 | 山田義男  | 吉田 治 |
| 吉田吉男 | 和田アイ子 |       |       |      |       |      |

# 日本植物形態学会会則

## 総則

第1条 本会は日本植物形態学会 (The Japanese Society of Plant Morphology) という。  
第2条 本会は植物形態学の発展と普及を図り、あわせて会員相互の親睦を深めるのを目的とする。  
第3条 本会は前条の目的を達成するために会報等の出版物の刊行、講演会など、そのほか必要と思われれる事業を行なう。

## 会員

第4条 本会の会員は次の2種とする：通常会員・団体会員。  
第5条 通常会員とは所定の会費を納める者をいう。  
第6条 団体会員とは所定の会費を納める団体をいう。ただし、団体会員は本会役員を選出・被選出にかかわる権利を持たない。また、第20条に定める会員の権利のうち、本会の刊行物の配布にかかわる権利のみを有する。

## 役員

第7条 本会には次の役員を置く：会長1名・幹事若干名・評議員若干名・編集委員長1名・編集委員若干名・会計監査1名。  
第8条 役員は会員の中から選出し任期は2年とする。  
第9条 会長は全会員の投票により就任の前年度中に選出される。会長は引き続き3期選出されることはできない。  
第10条 評議員は全会員の投票によって選出される。評議員は引き続き3期選出されることはできない。なお会長および会計監査は評議員を兼任することできない。  
第11条 幹事・編集委員長はいずれも会長が委嘱する。会計監査は会長が評議員会にはかかり、委嘱する。編集委員は編集委員長が選出評議員会にはかかり、会長がこれを委嘱する。  
第12条 会長は会務の全体を統括する。編集委員長は会報の編集に関する一切の責任を負う。幹事は庶務・会計・選挙管理など日常の会務を行なう。会計監査は会計を監査する。  
第13条 評議員会は評議員会を構成する。評議員会は会長の諮問の範囲で本会の要務を審議する。  
第14条 編集委員会は編集委員会を構成する。編集委員会は編集委員長の諮問の範囲で、会報の編集に関する要務を審議する。  
第15条 会長は必要に応じて特定の委員会を設けることができる。委員会の任務、委員の選出方法・任期等は評議員会が定める。

## 会計・会費

第16条 本会の会計年度は1月に始まり12月に終わる。  
第17条 通常会員の会費は年1000円とする。団体会員の会費は1口年10000円とする。

## 総会・講演会等

第18条 本会は原則として毎年1回総会を開き、会務を協議し議決する。なお会長が必要と認めた場合に臨時総会を開くことができる。  
第19条 本会は総会の時、研究発表及び講演会などを行なう。このため臨時の役員を置くことができる。臨時の役員は会長が委嘱する。

## 会員の権利・義務

第20条 会員は会合に出席して講演をし、議事に参加し、会報に投稿することができる。また定期刊行の会報は無料で配布を受ける。ただし、その他の刊行物の配布方法は評議員会の議を経て決定される。  
第21条 会員が退会しようとするときは、そのことを本会に通知しなければならぬ。ただし既に納めた会費は一切これを返さない。通常会員および団体会員が会費を滞納したときは直ちに前条の権利は停止され、1か年以上滞納したときは除名されることがある。

## 会則変更

第22条 本会の会則を変更するには総会または臨時総会でこれを協議し、出席会員の3分の2以上の同意を得なければならない。

## 付則

1. この会則は昭和63年1月1日から実施する。
2. 昭和63年1月1日からの会長と評議員については選挙方法を昭和62年に筑波で開催される「日本植物形態学会」設立総会で決定する。
3. 最初の評議員のうち、別に定める申し合わせにより約半数は引き続き2期選出されることは出来ない。この付則 2.3は昭和65年1月1日をもって、申し合わせ3とともに削除する。

## 申し合わせ

1. 役員の数等は当分下記の通りとする。  
会長 1、評議員10、幹事 2 (庶務、会計)、編集委員長 1、編集委員 2、会計監査 1。
2. 会長の選挙は単記、評議員の選挙は10名連記で、全会員の郵送による無記名投票によっておこなう。
3. 最初の評議員をアイウエオ順にならべて番号を付し、偶数番号の評議員は引き続き2期選出されることができない。



日程表

会期	会場	時間	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	
10月10日	カルチャータウンホテル														
10月12日	山陽学園短大														
10月14日	B, P (会場)														
(関連集会) 日本植物形態学会															
10月10日	A	生 態-I 1aA1~10	生 態-II 1pA1~16	生 態-I 1aB1~8	生 態-II 1pB1~16	生 態-I 1aC1~9	生 態-II 1pC1~16	生 態-I 1aD1~8	生 態-II 1pD1~11	生 態-I 1aE1~9	生 態-II 1pE1~16	生 態-I 1aH1~10	生 態-II 1pH1~11	生 態-I 1aK1~10	生 態-II 1pK1~15
10月13日	B	受賞 光合成-I (6) 1aB1~8	受賞 光合成-II (6) 1pB1~16	受賞 代謝・酵素-I (4) 1aC1~9	受賞 代謝・酵素-II (4) 1pC1~16	受賞 細胞(形態) (4) 1aD1~8	受賞 細胞(形態) (4) 1pD1~11	受賞 解剖・形態 (4) 1aE1~9	受賞 解剖・形態 (4) 1pE1~16	受賞 シンポジウム (4) 1aH1~10	受賞 シンポジウム (4) 1pH1~11	受賞 栽培植物と雑草 (4) 1aK1~10	受賞 栽培植物と雑草 (4) 1pK1~15	受賞 藻類-I (4) 1aH1~10	受賞 藻類-II (4) 1pH1~11
10月14日	C	受賞 藻類-I (4) 1aH1~10	受賞 藻類-II (4) 1pH1~11	受賞 シンポジウム (4) 1aK1~10	受賞 シンポジウム (4) 1pK1~15	受賞 細胞(生理)-I (4) 1aK1~10	受賞 細胞(生理)-II (4) 1pK1~15	受賞 光合成-I (4) 1aH1~10	受賞 光合成-II (4) 1pH1~11	受賞 代謝・酵素-I (4) 1aK1~10	受賞 代謝・酵素-II (4) 1pK1~15	受賞 細胞(形態) (4) 1aH1~10	受賞 細胞(形態) (4) 1pH1~11	受賞 藻類-I (4) 1aK1~10	受賞 藻類-II (4) 1pK1~15
10月15日	D	受賞 細胞(生理)-I (4) 1aK1~10	受賞 細胞(生理)-II (4) 1pK1~15	受賞 光合成-I (4) 1aH1~10	受賞 光合成-II (4) 1pH1~11	受賞 代謝・酵素-I (4) 1aK1~10	受賞 代謝・酵素-II (4) 1pK1~15	受賞 細胞(形態) (4) 1aH1~10	受賞 細胞(形態) (4) 1pH1~11	受賞 藻類-I (4) 1aK1~10	受賞 藻類-II (4) 1pK1~15	受賞 シンポジウム (4) 1aH1~10	受賞 シンポジウム (4) 1pH1~11	受賞 栽培植物と雑草 (4) 1aK1~10	受賞 栽培植物と雑草 (4) 1pK1~15
10月16日	E	受賞 シンポジウム (4) 1aH1~10	受賞 シンポジウム (4) 1pH1~11	受賞 栽培植物と雑草 (4) 1aK1~10	受賞 栽培植物と雑草 (4) 1pK1~15	受賞 藻類-I (4) 1aK1~10	受賞 藻類-II (4) 1pK1~15	受賞 細胞(生理)-I (4) 1aH1~10	受賞 細胞(生理)-II (4) 1pH1~11	受賞 細胞(形態) (4) 1aK1~10	受賞 細胞(形態) (4) 1pK1~15	受賞 藻類-I (4) 1aH1~10	受賞 藻類-II (4) 1pH1~11	受賞 シンポジウム (4) 1aK1~10	受賞 シンポジウム (4) 1pK1~15
10月17日	G	受賞 シンポジウム (4) 1aH1~10	受賞 シンポジウム (4) 1pH1~11	受賞 栽培植物と雑草 (4) 1aK1~10	受賞 栽培植物と雑草 (4) 1pK1~15	受賞 藻類-I (4) 1aK1~10	受賞 藻類-II (4) 1pK1~15	受賞 細胞(生理)-I (4) 1aH1~10	受賞 細胞(生理)-II (4) 1pH1~11	受賞 細胞(形態) (4) 1aK1~10	受賞 細胞(形態) (4) 1pK1~15	受賞 藻類-I (4) 1aH1~10	受賞 藻類-II (4) 1pH1~11	受賞 シンポジウム (4) 1aK1~10	受賞 シンポジウム (4) 1pK1~15
10月18日	H	受賞 栽培植物と雑草 (4) 1aK1~10	受賞 栽培植物と雑草 (4) 1pK1~15	受賞 藻類-I (4) 1aK1~10	受賞 藻類-II (4) 1pK1~15	受賞 細胞(生理)-I (4) 1aH1~10	受賞 細胞(生理)-II (4) 1pH1~11	受賞 細胞(形態) (4) 1aK1~10	受賞 細胞(形態) (4) 1pK1~15	受賞 藻類-I (4) 1aH1~10	受賞 藻類-II (4) 1pH1~11	受賞 シンポジウム (4) 1aK1~10	受賞 シンポジウム (4) 1pK1~15	受賞 栽培植物と雑草 (4) 1aK1~10	受賞 栽培植物と雑草 (4) 1pK1~15
10月19日	K	受賞 藻類-I (4) 1aK1~10	受賞 藻類-II (4) 1pK1~15	受賞 細胞(生理)-I (4) 1aH1~10	受賞 細胞(生理)-II (4) 1pH1~11	受賞 細胞(形態) (4) 1aK1~10	受賞 細胞(形態) (4) 1pK1~15	受賞 藻類-I (4) 1aH1~10	受賞 藻類-II (4) 1pH1~11	受賞 シンポジウム (4) 1aK1~10	受賞 シンポジウム (4) 1pK1~15	受賞 栽培植物と雑草 (4) 1aK1~10	受賞 栽培植物と雑草 (4) 1pK1~15	受賞 藻類-I (4) 1aK1~10	受賞 藻類-II (4) 1pK1~15
10月20日	P	受賞 シンポジウム (4) 1aH1~10	受賞 シンポジウム (4) 1pH1~11	受賞 栽培植物と雑草 (4) 1aK1~10	受賞 栽培植物と雑草 (4) 1pK1~15	受賞 藻類-I (4) 1aK1~10	受賞 藻類-II (4) 1pK1~15	受賞 細胞(生理)-I (4) 1aH1~10	受賞 細胞(生理)-II (4) 1pH1~11	受賞 細胞(形態) (4) 1aK1~10	受賞 細胞(形態) (4) 1pK1~15	受賞 藻類-I (4) 1aH1~10	受賞 藻類-II (4) 1pH1~11	受賞 シンポジウム (4) 1aK1~10	受賞 シンポジウム (4) 1pK1~15

展示物		発表	
粘菌-I 2aA1~11	粘菌-II 2pA1~12	生長生理-I 2pB1~7	生長生理-II 2pB1~7
発生・分化 2aC1~13	種分化・種生物-I 2pC1~13	植物形態研究の新展開から 2pE1~13	植物形態研究の新展開から 2pE1~13
シンポジウム 植物の緑色細胞のメカニクス 2aF1~10	シンポジウム 植物の緑色細胞のメカニクス 2pF1~10	培養細胞 2aG1~13	培養細胞 2pG1~13
生長生理-I 2aF1~10	生長生理-II 2pF1~10	光合成-I 2aG1~13	光合成-II 2pG1~13
細胞(形態)-I 2aH1~13	細胞(形態)-II 2pH1~13	細胞(形態)-I 2aK1~12	細胞(形態)-II 2pK1~13
細胞(生理)-I 2aK1~12	細胞(生理)-II 2pK1~13		

関連集会一覽表

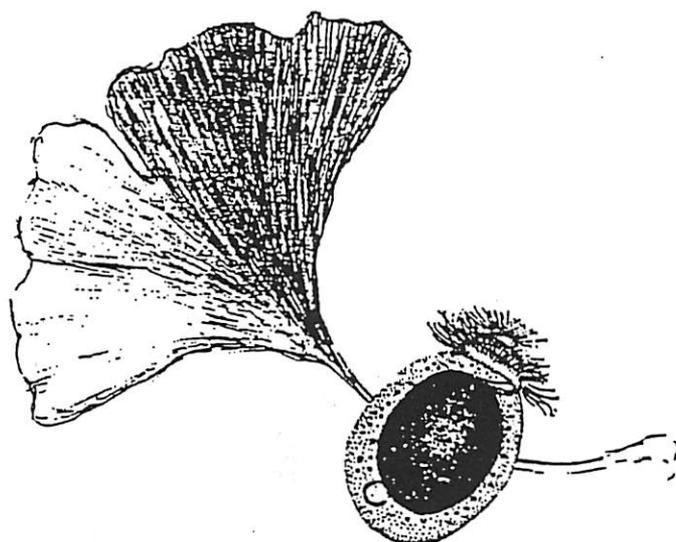
月	日	時間	集 会 名	責 任 者 (申 込 者)	内 容	会 場	参加費
10月12日	14:30 / 19:00	日本藻類学会 秋季シンポジウム	大森長朗 (〒703 岡山市平井1-14-1, 山陽学園短大, 0862-72-6254, 郵便振替 岡山2-36298)	海藻の利用と組織培養 (1) 西沢一俊 (日本大) : 海藻の特殊成分とその利用 (2) 藤嶋直恒 (北水研) : 海藻の組織培養研究の現状	山陽学園短大 D棟 2階 中講義室	2,500	
10月12日	11:00 / 17:30	日本植物形態学会 植物形態学の日	原重 (〒153 目黒区駒場3-8-1, 東大・教養・生物, 03-467-1171)	(1) 評議員会11:00~12:00 (2) 総会12:30~13:30 (3) 講演13:30~15:30 (20分×6件) (4) ポスター15:30~17:30 (50件)	岡山大・教養部 (大会会場 B, P)	2,000	
10月13日	18:00 / 20:00	日本シダ学会 植物形態学の日	山本泰 (〒700 岡山市津島中3-1-1, 岡山大・理・生物, 0862-52-1111, 内423)	(1) 報告 (国際会議の準備状況 他) (2) 葛藤裕一郎 (岡山大・理・生物) : 光化学系IIの電子供与体ZとDに関する最近の研究の進展	カルチャータウンホテル 4階 雀	1,500	
10月13日	18:00 / 20:00	根粒菌研究者の集い	東四郎・阿部美行子 (〒800 鹿兒島市都元1-21-35, 鹿兒島大・理・生物, 0992-54-7141, 内4360-4362)	根粒菌研究に関する現状の意見交換 話題提供者 田崎茂行 (香川大・農・生物資源) : ダイオキシンのエネルギー代謝	カルチャータウンホテル 3階 桜	1,500	
10月13日	18:00 / 20:00	日本シダ学会 植物形態学の日	加藤雅啓 (〒112 文京区白山3-7-1, 東京大・理・付属植物園, 03-814-0138)	(1) 長谷部光泰 (東大・理・植物園) : シダ植物におけるDNA化学分類学の現状と展望 (2) 懇親会	カルチャータウンホテル 6階 エタラド	1,500	
10月13日	18:00 / 20:00	生物教育研究会	佐藤七郎 (〒630 奈良市高畑町, 奈良教育大, 0742-26-1101)	主に高校の生物教育用生物用語語, 現在の教科書内容について, 教えるべきこと, 教えないべきことなど, あるいは教える方, 入試問題, その他について, 話し合いたい。	カルチャータウンホテル 3階 安	1,500	
10月13日	18:00 / 20:00	細胞進化研究会	中村連 (〒658 神戸市東灘区御木8-9-1, 甲南大・理・生物, 078-631-4841)	(1) 堀根三 (筑波大・生物系) : 核分裂機構, 細胞質分裂機構の進化 (2) 山田寛弘 (東大・教養・生物) : 藻類の多不飽和脂肪酸と系統	カルチャータウンホテル 4階 鳳	1,500	
10月13日	18:00 / 20:00	コケの会	井本強二 (〒700 岡山市市富2-21-32, 0862-73-5311)	特別講演 井上 浩・出口博則: チリの蘚苔類調査報告	カルチャータウンホテル 3階 飛鳥 A	1,500	
10月13日	18:00 / 20:00	植物生理若手研究者の集い	吉石晋二 (〒860 熊本市黒髪2-39-1, 熊本大・理・生物, 096-344-2111, 内3439, 3431) 森安裕三 (〒422 静岡市谷田395, 静岡県立大, 0542-64-5226)・三橋涉 (〒444 岡崎市明大寺町西郷中38, 其生研, 0564-54-1111, 内612)	(1) 岡谷次郎 (岡山大・農) : 温帯に生育する常緑広葉樹のグリセロ脂質 (2) 藤沼宗和 (岐阜大・生薬) : フラボノイドの化学と化学分類 (3) 作田正明 (お茶の水女子大・理・生) : 培養細胞におけるベータシアンチン生成 (4) 高橋秀幸 (東北大・遺伝生態研究センター) : 植物の重力生理学	カルチャータウンホテル 6階 ルビー カルチャータウンホテル 6階 サファイヤ	1,000	
10月13日	18:00 / 20:00	植物形態学の日	武丸恒雄 (〒700 岡山市津島中3-1-1, 岡山大・理・生物, 0862-52-1111, 内420)	情報交換と討論	カルチャータウンホテル 4階 丹頂	1,500	
10月13日	18:00 / 20:00	植物ホルモン研究者の集い	倉石晋 (〒730 広島市中区東千田町1-1-89, 広島大・総合科学・自然環境, 082-241-1221, 内3780)	最近の植物ホルモン研究の現状と解析	カルチャータウンホテル 3階 飛鳥 B	1,500	
10月13日	18:00 / 20:00	植物ホルモン研究者の集い	岡本尚 (〒464 名古屋千種区不老町, 名大・理・生物, 052-781-5111, 内2507)	(1) 講演, 筒井雄雄 (阪大・教養・生物・生理研) : 興奮性チャネルの制御様式 — 車軸藻を中心として (2) 報告と相談: a) 第22回山田コンフェレンス「ストレスト下における水代謝と生長」について b) 第8回 International Workshop on Plant Membrane Transport (Venezia)について	カルチャータウンホテル 3階 安	1,500	

資料 9 . Plant Morphology 創刊号 p.1-5 (1989年)

Vol 1 (1989)

No 1

# PLANT MORPHOLOGY



The Japanese Society of Plant Morphology

日本植物形態学会の設立と  
会誌「Plant Morphology」の発刊に際して

会長 原 襄

数年間にわたる多数の方々のご協力により、今年（1988年）1月に日本植物形態学会が設立されて、10月12日には岡山で第1回の大会と総会が開催され、予想を上回る盛会となりました。

本学会は植物の形態・構造、そしてその機能に関連した分野の研究者が、新しい技術や思考の流れを積極的に論議し、実質的な相互の交流の場を持つという趣旨をもって、多数の方々のご賛同を得て発足いたしました。まずは今年の大会でその趣旨が確認されたように感じております。しかし、未だに本会に入会されていない植物形態学に関連した多数の研究者がおられます。本会の発展のためには、さらに数多くの方々に入会していただき、交流の場を大きく広げていくことが望まれます。快くご入会いただける方々も多いことと思われまので、会員の皆様から積極的に入会のお勧めをしていただきたく、お願い申し上げます。

さて、会員相互の交流のためには大会は大切な行事ですが、もうひとつの学会の柱は会報です。今回の総会では、本学会の会誌として「Plant Morphology」を発刊することが決定され、その投稿規定が承認されました。そしてここに、その第1巻第1号が出版される運びとなりました。

「Plant Morphology」には、原著論文として英文、和文の短報形式の論文を投稿できます。奮ってご投稿ください。この会誌が研究の推進に役立ち、論文を通して会員相互の理解が高まれば幸いです。

我が国ではすでに「Botanical Magazine, Tokyo」ほか、植物学関係の多くの学術雑誌が出版されています。「Plant Morphology」は、これらの出版物と競合するということではなく、相補的に我が国の植物形態学の推進に役立つことを目指しております。このことをご理解のうえ、本誌の充実・発展にご協力いただきたく、お願い申し上げます。

日本植物形態学会は、1985年に新潟で開催された日本植物学会大会の際に、植物形態学の将来についての討論がおこなわれて以来、多数の方々のご協力を得て設立に漕ぎつけることができました。以下に簡単にその設立までの経緯をまとめさせていただき、それぞれの節目に格別のご協力をいただいた方々への感謝の気持ちを表し、さらに皆様とともに本学会の発展を期して参りたいと存じます。

## 日本植物形態学会設立までの経緯

1985年10月 2日 日本植物学会大会（新潟）で、(1) シンポジウム「植物形態学の現状と展望—形なりたち」が開催された。(2) 「植物形態学の将来」について討論が行われた。

1986年10月 7日、 8日 日本植物学会大会（鹿児島）で、(1) シンポジウム「構造の複製と分化」が開催された。(2) 日本植物形態学会設立準備委員会の発足が決定された。(3) この大会の懇親会のあと、初回の設立準備委員会が開催された。

1987年 3月14日、15日 岡崎の基礎生物学研究所で、設立準備委員会委員を中心にした研究会が開催され、事務的な段取りが整理された。

1987年11月26日 日本植物学会大会（筑波）で、(1) シンポジウム「細胞構造の理解は変わる—蛍光顕微鏡の発展と応用」が開催された。(2) 設立準備委員会が開催された。(3) 日本植物形態学会を、1988年 1月 1日から発足させることが決定された。

1988年 1月 1日以降は、しばらくのあいだ設立準備委員会が学会の事務を代行しておりましたが、3月には役員選挙が行われ、4月からは学会の態勢が整い、10月12日には第1回の大会（岡山）が開催される運びとなりました。また、今年（1988年）の日本植物学会大会（岡山）では、シンポジウム「植物形態研究の新展開から」が開催されました。

なお、今回は第1回大会であり、すべてはじめての試みということで、地元、岡山大学の武丸恒雄氏、鎌田 堯氏、神田東作氏ほかの方々には並々ならぬお世話をいただきました。ここに厚く感謝の意を表したいと存じます。

以上

# 日本植物形態学会事務報告

1. 設立: 昭和63年1月に日本植物形態学会が3年間の準備委員会による準備過程を経て、発起人の趣意書に賛同する155名の会員で発足した。本学会則は、昭和62年11月26日(木)の日本植物学会第52回大会(筑波大学)の関連集会で決定されている。

同年3月19日、会長および評議員の選挙開票を基礎生物学研究所で田中健治氏立会いの下で行なった。投票数は107票であった。その結果、会長に原襄氏と下記の評議員10名が選出された。

3月26日、原会長、黒岩、新津両評議員および田中健治氏が東京大学理学部黒岩教室で会合を開き、つぎの役員を内定した。

会 長	: 原 襄	評議員 (アイウエオ順)	
庶務幹事	: 新津 恒良	伊藤 道夫	植田 勝巳*
会計幹事	: 長船 哲斉	黒岩 常祥	駒嶺 稔*
会計監査	: 西田 誠	相馬 研吾	竹内 郁夫*
編集委員長	: 田中 健治	新津 恒良	福田 泰二*
編集委員	: 鈴木 三男	堀 輝三	村上 悟*
〃	: 野口 哲子		

\*印の方は、会則の申し合せにより引続き2期選出されることができない評議員である。

庶務・会計両幹事と編集委員長は会則11条により、会長が委嘱した。会計監査と編集委員については同条規定にしたがい、郵送により評議員会にはかり、その同意を得て委嘱した。(役員任期は2年である)。この結果、4月5日、準備委員会は任務を完了し、学会事務に移行した。

また、当面の事務局、会費振込口座および会誌編集はつぎのように決定された。

## 事務局

〒182 東京都調布市国領町8-3-1

慈恵医大・生物学教室内

日本植物形態学会

庶務幹事: 新津 恒良

事務取扱者: 花野万里子

## 会費振込口座

郵便振替口座 東京9-362060

日本植物形態学会

〒180 東京都新宿区新宿6-1-1

東京医大・微生物学教室内

会計幹事: 長船 哲斉

## 会誌原稿送付先

〒466 名古屋市昭和区鶴舞町65

名古屋大学医学部病態制御研究施設

医真菌研究部門

編集委員長: 田中 健治

2. 会員数：通常会員数は、発会当初155名であったが三井邦男氏が逝去され、またその後の入会者により10月末日現在209名である。

3. 第1回大会：第1回大会は日本植物学会第53回大会の前日の昭和63年10月12日（水）に岡山大学教養部および学生会館で行なわれた。参加者は106名であった。第1回の大会のため、今回に限り会長と在京評議員が大会準備を行い、会場については武丸恒雄教授をはじめ岡山大学の会員のご援助を頂いた。

11時から13時まで第1回の評議員会を同大学会議室で、13時から14時まで竹内郁夫評議員を議長として総会を行なった。会長挨拶、庶務・会計報告につづいて大会、学術会議関係の報告があった。続いて審議事項に移り編集委員長から会誌「Plant Morphology」の投稿規定が提案され、承認された（評議員会では時間をかけて討論し、原案が作成された）。また1989年度からの年会費を値上げして2,000円とする案が提案され、承認された。次回大会は仙台で開催し、東北大学の駒嶺穆氏のお世話で行なうことを決定した。会長が所用で退席したあとは黒岩評議員が代行した。

14時から同会場で講演4題（別紙プログラム）が植田勝己、福田泰二両氏の座長で行なわれ、活発な討議があった。15時から会場を学生会館に移し、30題の展示講演（別紙プログラム）が行なわれ、予定時間を延長して熱心なディスカッションが続いた。会場には参加会員全員が参加し、茶菓の用意もあって懇親を深めながらの討論で18時に解散した。

4. 設立準備委員会の解散：昭和60年10月2日に本学会設立のために当初世話人7名で趣意書案などの検討をはじめたが、61年10月8日に設立準備委員会がつぎの15名で本格的な準備をはじめた。

原 襄（東大・教養：委員会代表）〈以下アイウエオ順〉  
植田 勝己（奈良女子大・理） 小野 莞爾（熊本大・理）  
加藤 雅啓（東大・理） 黒岩 常祥（基生研・細胞生物）  
佐藤 利幸（北大・低温研） 三戸 信人（山口大・理）  
田中 健治（名大・医） 田中 隆荘（広島大・理）  
長田 敏行（基生研・細胞生物） 新津 恒良（慈恵医大）  
福田 泰二（千葉大・教養） 堀 輝三（筑波大・生物科学）  
増田 恭次郎（富山大・理） 村上 悟（東大・教養）

前記の通り本学会が63年1月1日に発足したが、会長、評議員選挙が終り、役員が決定した段階で設立準備委員会はその役割を終り解散した。

（庶務幹事：新津 恒良）

5. 学会収支報告：昭和63年1月1日から10月8日までの収支決算はつぎの通りである。  
(第1回大会総会で報告した。)

決 算 報 告 (単位 円)

収 入	3 6 8 , 1 3 6
支 出	4 4 , 3 1 4
収支差額	3 2 3 , 8 2 2

〈収入明細〉

会費収入	165名×1.000	165.000
	前受会費 13件	13.000
寄付金	3社*	180.000
	会員からの寄付(3名)	10.000
雑収入	利息	36
	口座開設費	100
		388.136

〈支出明細〉

通信費	22.764
印刷費	9.960
雑費	11.590
	44.314

預金口座名	三井銀行四ッ谷支店(普通)	5 3 4 3 9 9 8
	郵便局 新宿抜弁天	9 - 3 6 2 0 6 0

- \*寄付金を頂いた会社はつぎの通りです。改めて御礼申し上げます。  
セイシン製菓、ヤクルト本社、日新EM社

お願い：今後とも賛助していただける団体・会社をご紹介くださるよう会員各位にお願いいたします。

6. 第1回大会収支報告：第1回大会は昭和63年10月12日(水)に行なわれた(記事3参照)。

決 算 報 告

収 入	106名×2.000	2 1 2 , 0 0 0
支 出		9 9 , 1 7 0
〈内訳〉	1. ポスターパネル使用料 30×@1.500	45.000
	2. アルバイト謝金 6名×@4.000	24.000
	3. 雑費	30.170
収支差額		1 1 2 , 8 3 0

(会計幹事：長 船 哲 斉)

資料 10 . Plant Morphology Vol.10 原襄先生追悼号 p.1-2 (1998年)

Vol 10 (1998)

No 1

ISSN 0918-9726

# PLANT MORPHOLOGY



The Japanese Society of Plant Morphology

## 日本植物形態学会 1998年度役員

会 長： 植田勝巳（奈良先端大学バイオサイエンス）  
庶務幹事： 鈴木孝仁（奈良女子大学理学部生物科学科）  
会計幹事： 幡野恭子（京都大学総合人間学部自然環境学科）  
会計監査： 戸部 博（京都大学総合人間学部自然環境学科）

評議員： 大隅正子（日本女子大学理学部物質生物科学科）  
長船哲斎（日本体育大学健康科学科）  
河野重行（東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻）  
黒岩常祥（東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻）  
黒岩晴子（東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻）  
鈴木三男（東北大学理学部附属植物園）  
箸本春樹（東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻）  
宝月岱造（東京大学アジア生物資源環境研究センター）  
堀 輝三（筑波大学生物科学系）

### 編集委員会：

委員長： 野口哲子（奈良女子大学理学部生物科学科）  
委 員： 坂口修一（奈良女子大学理学部生物科学科）  
岩口伸一（奈良女子大学理学部生物科学科）

### 事務局：

〒630-8506 奈良市北魚屋西町  
奈良女子大学理学部生物科学科内  
日本植物形態学会（庶務幹事：鈴木孝仁）  
PHONE：0742-20-3419 FAX：0742-20-3419  
e-mail：takahito@cc.nara-wu.ac.jp

会費振込口座：郵便振替00120-2-669588（加入者名：日本植物形態学会）

# PLANT MORPHOLOGY

Vol. 10, No. 1, December 1998

## CONTENTS

### 追悼

- Professor Noboru Hara: An appreciation of his work on the shoot apex.  
R. F. Lyndon..... 1  
原襄先生 日本の植物発生解剖学の発展とともに  
西野栄正..... 2

### 論文

- Comparative anatomy on the structure of vascular cambium in some Betulaceous plants.  
K. S. Han, and W. Y. Soh..... 4  
Structure changes of zoospores during and after net formation in *Hydrodictyon reticulatum*.  
K. Hatano, and K. Maruyama..... 14

### 総説

- 高等植物におけるGFPの利用  
丹羽康夫..... 22  
加圧凍結法による高等植物実生分裂組織細胞の観察  
峰雪芳宣・村田隆・T. H. Giddings, Jr.・L. A. Staehelin..... 30

### 学会賞受賞者ミニレビュー

- ミトコンドリアの分裂装置の発見に至る随想  
黒岩常祥（形態学会賞）..... 40  
同調培養*Chlamydomonas*におけるミトコンドリアの動態  
江原友子（平瀬賞）..... 50  
被子植物の雄性配偶子特異的ヒストンの検出  
田中一朗（平瀬賞）..... 60  
ナガサキツノゴケの色素体DNA複製サイクルに関する研究  
泉 好弘（奨励賞）..... 68  
Male reproductive organ-specific genes in the dioecious plant *Silene latifolia*.  
S. Matsunaga（奨励賞）..... 76

- 授賞理由（田中健治）..... 84  
第10回大会を顧みて（坂口修一）..... 85  
日本植物形態学会第10回大会（東広島）展示発表要旨..... 86  
会長挨拶（植田勝巳）..... 94  
科研費情報..... 95  
事務報告..... 97  
会計報告..... 98

## 追悼

原 襄 (Noboru HARA: 1931-1998)

日本植物形態学会の初代会長であられた原襄先生は、病氣療養中のところ、1998年6月8日、66歳の若さで逝去されました。先生は、本学会の創生期、二期にわたり会長を務められ、本学会の設立とその後の運営にご尽力されました。先生は、世界的に評価の高い幾多の原著論文のほか、植物形態学に関する教科書を複数著され、日本における正統的な植物形態学の確立、普及に努められ、植物形態学界のみならず日本の植物科学界全体に対し指導的役割をになってこられました。1996年にはこれらの功績に対し、第1回日本植物形態学会賞が贈られています。ここに先生の生前の業績を偲ぶ文章を掲載し、先生のご冥福を心からお祈り申し上げたいと思います。



### Professor Noboru Hara: *An appreciation of his work on the shoot apex*

Dr Hara was particularly interested in the shoot apex and made significant contributions to our understanding of the shoot apical meristem. He showed that longitudinal files of cells were a characteristic feature of the apical surface. He described sectors of the apex, each sector subtended by the base of a leaf or a primordium, so that the number of sectors corresponded to the number of leaves and primordia at the shoot apex. Each sector was characterised by radial longitudinal files of cells. The initiation of new files at the site of the next primordium was the first sign of initiation of this primordium, well in advance of any sign of protrusion of the primordium. He made these studies primarily in *Daphne* (Hara, 1961, 1962) and *Clethra* (Hara, 1971abc), but showed that similar observations could be made on other plants (Hara, 1975, 1980b), including the gymnosperm *Ginkgo* (Hara, 1980a). They provide some of the key evidence that longitudinal polarity of growth is characteristic of the shoot apex surface and is consistent with a gradient of increasing growth rate from the apical summit to the flanks where the leaves are initiated. He went on to show that this pattern of radial files disappeared when the apex is reorganised to form the reproductive apex (Hara, 1977).

Dr Hara also observed that in the shoot apex of *Clethra*, the central zone fluctuated in size, being smallest at the minimal area phase of the plastochron and largest at the maximal area phase (Hara, 1971). Significantly, he could find no evidence for cell divisions frequent enough to account for this rapid enlargement of the central zone. This supports similar observations in other plants and suggests that the central zone is a phenomenon in which the cells alter in stainability (and possibly degree of hydration?) probably indicating physiological and biochemical changes in the central zone which are linked to leaf initiation, and which are yet to be investigated.

In collaboration with Drs Sakaguchi and Hogetsu, Hara went on to examine the orientation of microtubules in the cells of the shoot apex by the methods of immunofluorescence and polarising microscopy (Sakaguchi, Hogetsu and Hara, 1988ab, 1990). He was able to show that the orientation of the microtubules paralleled that of the cellulose wall microfibrils in the *Vinca* shoot apex, and that in angiosperm and gymnosperm apices in general (including *Vinca*) the microtubules were mainly anticlinally arranged in the tunica, random in the corpus and transverse in the rib meristem and thus reflected the planes of cell division throughout the apex. The implications of this work are that the directions of growth and expansion of the apical cells, and thus the apical architecture and growth, are closely linked to, and perhaps determined by, the orientation of the microtubules. Dr

Hara's work points the way to a deeper understanding of the way microtubules are involved in the organisation and functioning of the shoot apical meristem.

Dr Robert F Lyndon  
Institute of Cell and Molecular Biology  
University of Edinburgh, EH9 3JH  
Scotland, UK

- Hara, N. (1961). Apical views of vegetative shoot apex. *Botanical Magazine Tokyo*, 74: 267-268.
- Hara, N. (1962). Structure and seasonal activity of the vegetative shoot apex of *Daphne pseudo-mezereum*. *Botanical Gazette*, 124: 30-42.
- Hara, N. (1971). Structure of the vegetative shoot apex of *Clethra barbinervis*. I. Superficial and transectional views. *Botanical Magazine Tokyo*, 84: 8-17.
- Hara, N. (1971). Structure of the vegetative shoot apex of *Clethra barbinervis*. II. Supplementary study on superficial view. *Botanical Magazine Tokyo*, 84: 61-68.
- Hara, N. (1971). Structure of the vegetative shoot apex of *Clethra barbinervis*. III. Longisectional view, summary analysis and discussion. *Botanical Magazine Tokyo*, 84: 283-292.
- Hara, N. (1975). Structure of the vegetative shoot apex of *Cassiope lycopodioides*. *Botanical Magazine Tokyo*, 88: 89-101.
- Hara, N. (1977). Ontogeny of the reproductive shoot apex of *Clethra barbinervis*, especially on the superficial view. *Botanical Magazine Tokyo*, 90: 89-102.
- Hara, N. (1980). Shoot development of *Aucuba japonica* I. Morphological study. *Botanical Magazine Tokyo*, 93: 101-116.
- Hara, N. (1980). Morphological study on early ontogeny of the *Ginkgo* leaf. *Botanical Magazine Tokyo*, 93: 1-12.
- Sakaguchi S., Hogetsu, T. and Hara, N. (1988). Arrangement of cortical microtubules in the shoot apex of *Vinca major* L. Observations by immunofluorescence microscopy. *Planta*, 175: 403-411.
- Sakaguchi S., Hogetsu, T. and Hara, N. (1988). Arrangement of cortical microtubules at the surface of the shoot apex in *Vinca major* L. Observations by immunofluorescence microscopy. *Botanical Magazine Tokyo*, 101: 497-507.
- Sakaguchi, S., Hogetsu, T. and Hara, N. (1990). Specific arrangements of cortical microtubules are correlated with the architecture of meristems in shoot apices of angiosperms and gymnosperms. *Botanical Magazine Tokyo*, 103: 143-163.



## 原 襄 先 生      日本植物発生解剖学の発展とともに

西 野 栄 正

千葉大学園芸学部生物生産科学科植物構造学研究室 (〒271-8510 松戸市松戸 648)

原襄先生は1998年6月8日にお亡くなりになりました。東京大学教養学部を1992年に定年退官され、その後も引き続き教育と研究に熱心に打ち込んでおられたさなかでした。ここに慎んでご冥福をお祈り申し上げます。

原先生については、日本植物形態学会の会長を学会発足時の1988年より1991年までされていたことや、1996年に日本植物形態学会賞を最初に受賞されたことで、先生の研究内容とともに会員諸氏にはもちろんよくご存知のことと思います。でもそれだけでなく、先生の植物形態学のいくつかの著書や、他の植物学の分野の発展に関連して植物形態学を紹介した著書や雑誌の特集記事を通して、いろいろな分野の方が植物の形態に関する最新の知識を得ていたことと思います。

先生の研究の中心は、本誌第8巻(1996)で学会賞受賞者ミニレビューとして掲載されている「シュート頂(茎頂)の構造と葉の発生・発達」のように、植物形態学の中でも特に発生解剖学とよばれる分野でした。そしてこの分野は最近進歩の著しい植物発生生物学と密接な関連がある分野



## 日本植物形態学会30周年記念事業実行委員

佐々木 成江 (広報委員長)

吉田 大和 (広報委員)

宮沢 豊 (前広報委員)

永田 典子 (庶務幹事)